口が原遺跡

日田市埋蔵文化財調査報告書第17集

1998

日田市教育委員会

口が原遺跡

ロが原遺跡全景

序　　文

一昨年、大分自動車道の全面開通により日田は九州の中心地として物流の面からも大変重要視されている次第であります。また、恵まれた自然環境にあることから、この度サッポロビール新九州工場が当地に進出することになりました。

日田盆地では、台地上の至るところに多くの遺跡を有しており今回の工場予定地におきましても弥生時代～近世にかけての遺構・遺物の発見と共に多くの成果を得ることができました。

本書が文化財理解の一助となり広く活用いただければ幸甚です。最後になりましたが、調査にご協力いただいた関係各位、調査に当たってご指導ご助言をいただいた諸先生方に厚くお礼を申し上げます。

平成10年３月31日

日田市教育委員会教育長　加藤　正俊

例　　言

1．本書は、日田市教育委員会が日田市土地開発公社から委託されて発掘調査を実施した、口が原遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．調査にあたっては、日田市土地開発公社、日田市企業立地推進室及び地元の全面的な協力をいただいた。

3．遺構実測は調査者全員が行い、浄書は吉田博嗣が行った。また、遺物の実測と浄書は行時志郎、吉田、松竹智之（別府大学学生）が行った。

4．本書の執筆、編集は吉田が行った。

5．航空写真は九州航空に委託し撮影したもので、遺物の写真については文化財写真家長谷川正美氏による撮影である。

6．出土遺物、遺構、遺物の図面および写真等は、日田市埋蔵文化財センターにて保管している。

7．調査中および本書を作成するにあたり、下記の方々に多大なご教示、ご協力をいただいた。記して感謝を申し上げます。

後藤宗俊（別府大学教授）、渋谷忠章、高橋　徹、村上久和、
西　哲弘、小林昭彦、田中裕介（大分県教育委員会文化課）、
原田昭一（大分県宇佐風土記の丘資料館）

（敬称略）

本　文　目　次

Ⅰ　調査の経過

1．調査に至る経過 …… 1

2．発掘調査の経過 …… 1

3．調査組織 …… 3

4．歴史・地理的環境 …… 4

Ⅱ　ロが原遺跡の調査

1．竪穴住居跡 …… 7

2．掘立柱建物 …… 21

3．土　　坑 …… 22

4．その他の遺物 …… 25

Ⅲ　まとめ …… 27

挿　図　目　次

第１図　調査区位置図 …… 2

第２図　ロが原遺跡周辺遺跡分布図 …… 5

第３図　１号住居跡実測図 …… 7

第４図　１号住居跡出土遺物実測図 …… 8

第５図　２号住居跡出土遺物実測図 …… 9

第６図　２号住居跡実測図 …… 9

第７図　３号住居跡実測図 …… 10

第８図　３号住居跡出土遺物実測図 …… 10

第９図　４号住居跡実測図 …… 11

第10図　４号住居跡出土遺物実測図 …… 12

第11図　５号住居跡出土遺物実測図 …… 12

第12図　５号住居跡実測図 …… 13

第13図　６号住居跡実測図 …… 14

第14図　６号住居跡カマド実測図 …… 14

第15図　６号住居跡出土遺物実測図 …… 14

第16図　７号住居跡実測図 …… 15

第17図　７号住居跡カマド実測図 …… 16

第18図　７号住居跡出土遺物実測図 …… 16

第19図　８号住居跡出土遺物実測図 …… 16

Ⅰ　調査の経過

１．調査に至る経過

本遺跡は日田市におけるサッポロビール㈱新九州工場の進出に伴う工場用地取得造成事業に先立つ事前調査として実施された。

当初、工場予定地は三隈川南岸の上野台地が有力な候補地とされ、当地区は日田市でも有数の遺跡密集地であるため相当な数の遺構・遺物の出土が予想されていたが、その後計画の変更が行われ、より東側の高瀬地区に移るはこびとなった。

今回調査を実施した高瀬地区については、市経済部企業立地推進室より上記の内容に伴う埋蔵文化財の有無の確認に関する照会文が提出され、これを受けて市教育委員会では当該事業予定地が遺跡である可能性を十分に含んでいたため、同事業予定地（全体面積約154,000㎡）のうち約10,000㎡を対象とした試掘調査を行った。

試掘調査は、山林部を多く有していたため約100ヵ所のトレンチを設定して平成８年12月９日から平成９年１月30日まで人力による調査を行った。この結果、トレンチにおいて竪穴住居跡、土坑、柱穴などの遺構が確認されるとともに多くの遺物が出土した。

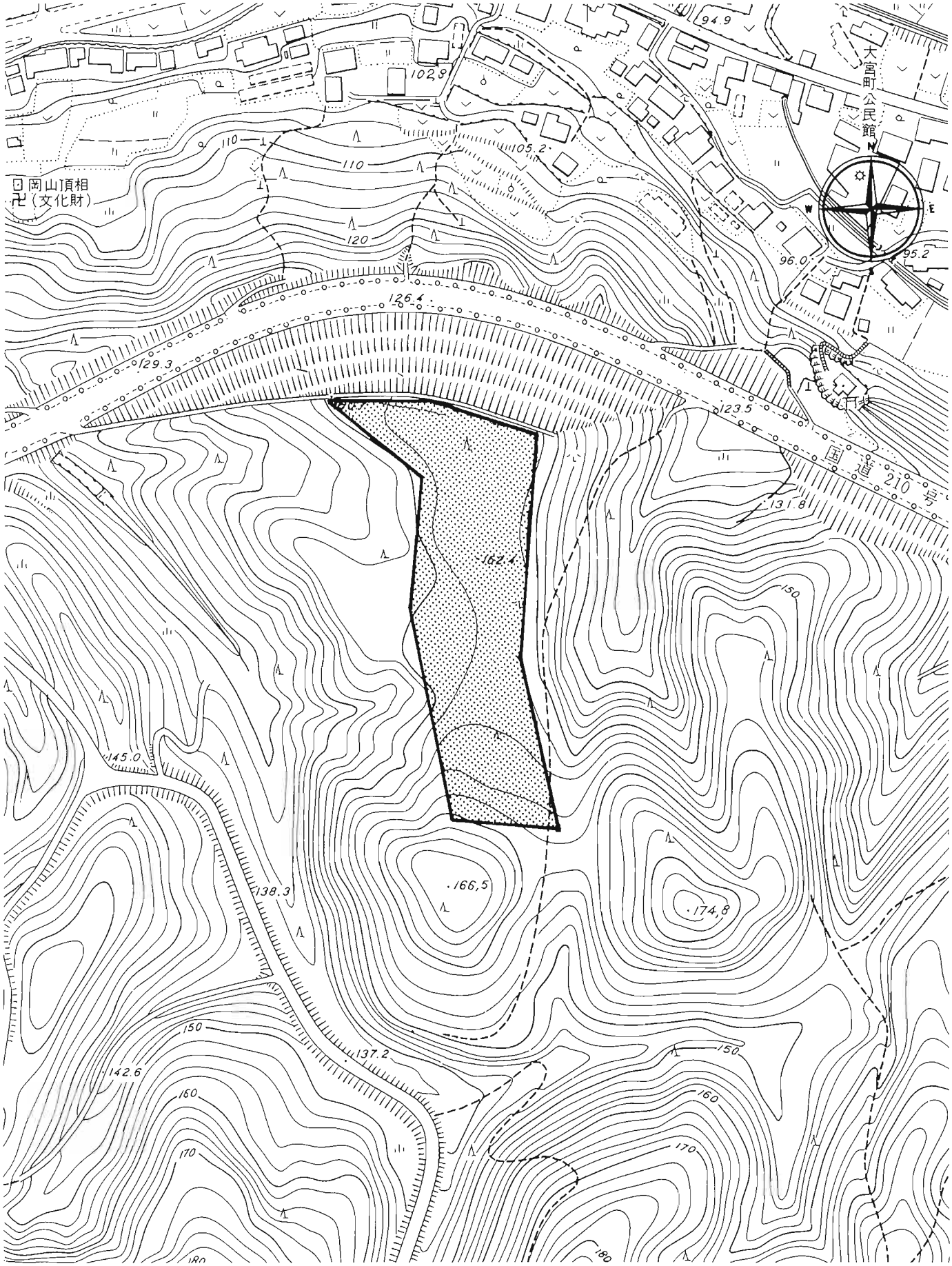
このため企業立地推進室とその取り扱いについての協議を行い、事業予定地のうち9,000㎡を対象とした発掘調査を実施することとした。

調査期間は、平成９年２月から約２ヶ月間とし、その後出土遺物の整理を行うとともに平成９年度中に報告書作成を含めた全ての工程を終了することとなった。

２．発掘調査の経過

発掘調査は試掘調査の結果をもとに協議で決まった区域を対象に実施することとした。

調査は平成９年２月10日から始まり、まずバック・ホーによる表土除去作業を南側斜面から行った。特に遺構の発見はなく、わずかに黒曜石の破片が出土しただけであったが、念のため南側斜面にはグリッドを設定し掘り下げた結果、遺構・遺物の発見には至らなかった。その後、斜面がゆるやかに傾斜し始める位置で最初の竪穴住居跡が検出された。調査前は畠地として耕作されていたため、北側が大きく削平を受けているようである。調査区中央はコンターが安定しており、遺構が確認できる場所のなかで最も高い位置にある。周辺から検出された遺構は、比較的遺存状況もよかった。また、遺構の密集度は中央付近に高い状態を示しており、特に西側には柱穴が集中していた。調査が北側に移ってからは東西で竪穴住居跡が検出されたが、西側の状況に対して東側ではひとつのまとまりをみることができた。以上、遺跡全体の遺構検出の数は決して多くはないがその反面、周辺台地との比較から過疎地であることの問題点を考えるべきである。調査終盤の４月に入り雨の多い日が続いていたが空中写真撮影も雨のなか行われ、ほぼ予定通りの４月23日をもって調査は終了した。また、出土遺物の整理作業は平成９年２月12日～同年６月30日まで行った。



第１図　調査区位置図（１／2,500）

第20図　8号住居跡実測図 …… 17
第21図　9号住居跡実測図 …… 18
第22図　10号住居跡実測図 …… 18
第23図　10号住居跡出土遺物実測図 …… 19
第24図　11号住居跡実測図 …… 19
第25図　12号住居跡実測図 …… 20
第26図　12号住居跡出土遺物実測図 …… 20
第27図　1号掘立柱建物 …… 21
第28図　1号土坑実測図 …… 22
第29図　2号土坑実測図 …… 23
第30図　3号土坑実測図 …… 23
第31図　4号土坑実測図 …… 23
第32図　1号土坑出土遺物実測図 …… 23
第33図　3号土坑出土遺物実測図 …… 23
第34図　5号土坑実測図 …… 24
第35図　その他の遺物実測図（土器） …… 25
第36図　その他の遺物実測図（石器） …… 26
第37図　ロが原遺跡集落概観図 …… 28

図　版　目　次

巻頭図版　ロが原遺跡全景
図版1　ロが原遺跡遠景（庁舎より望む）
図版2　1号住居跡　2号住居跡　3号住居跡
図版3　4号住居跡　5号住居跡　5号住居跡屋内土坑遺物出土状況
図版4　6号住居跡　6号住居跡カマド支脚　7号住居跡
図版5　8号住居跡　9号住居跡　10号住居跡
図版6　11号住居跡　5号土坑　5号土坑土層断面
図版7　1号掘立柱建物　1号土坑
図版8　1号住居跡出土遺物　3号住居跡出土遺物　4号住居跡出土遺物
図版9　5～8号住居跡出土遺物　10号住居跡出土遺物　12号住居跡出土遺物
図版10　12号住居跡出土遺物
図版11　その他の遺物

付　図　目　次

付図1　ロが原遺跡遺構配置図（第2図のあとに挿入）

3．調査組織

各年度の調査における組織は次のとおりである。なお、職名は当時のままとする。

（平成８年度）

調 査 主 体／日田市教育委員会

調査責任者／加　藤　正　俊（日田市教育委員会教育長）

調 査 事 務／原　田　俊　隆（日田市教育委員会文化課課長）

長　尾　幸　夫（同文化課課長補佐兼文化財係長）

森　山　一　宏（同文化課主任）

竹　原　里　香（同文化課臨時職員）

調　査　員／土　居　和　幸（同文化課主任）

森　山　敬一郎（同文化課嘱託）

作業員（発掘）梶原みとし、小野忠臣、野村　勉、坂本都美子、坂本今朝人、梶原サツ子、梶原秋生
横尾テル子、渡辺芳五郎、益永　勇、梅木鈴子、園田義雄、穐本文雄、宇野ヒトエ
木下カネ、宇野京子、横尾ノブ子、刎　留造、安心院　司、寺口　整、宇野カスミ、
高野　瞳、横尾フサエ、加藤キヨ子、宇野アサエ、毛利泰雄、宮崎正勝、穴井和馬
毛利十四男、河津　基、松竹智之、園田　大、下限久司、池田智之、荒木邦彦、
和田徹二郎、矢幡芳樹

（平成９年度）

調 査 主 体／日田市教育委員会

調査責任者／加　藤　正　俊（日田市教育委員会教育長）

調 査 事 務／原　田　俊　隆（日田市教育委員会文化課課長）

長　尾　幸　夫（同文化課課長補佐兼文化財係長）

森　山　一　宏（同文化課主任）

竹　原　里　香（同文化課臨時職員）

調　査　員／土　居　和　幸（同文化課主任）

吉　田　博　嗣（同文化課主事）

永　田　裕　久（同文化課主事補）

作業員（発掘）平成８年度に同じ

（整理）和田ケイ子、聖川暢子、伊藤弘子、羽野恭子、田中静香、小埜和美、松本佳織
黒木千鶴子、川原君子、河原直美

4．歴史・地理的環境

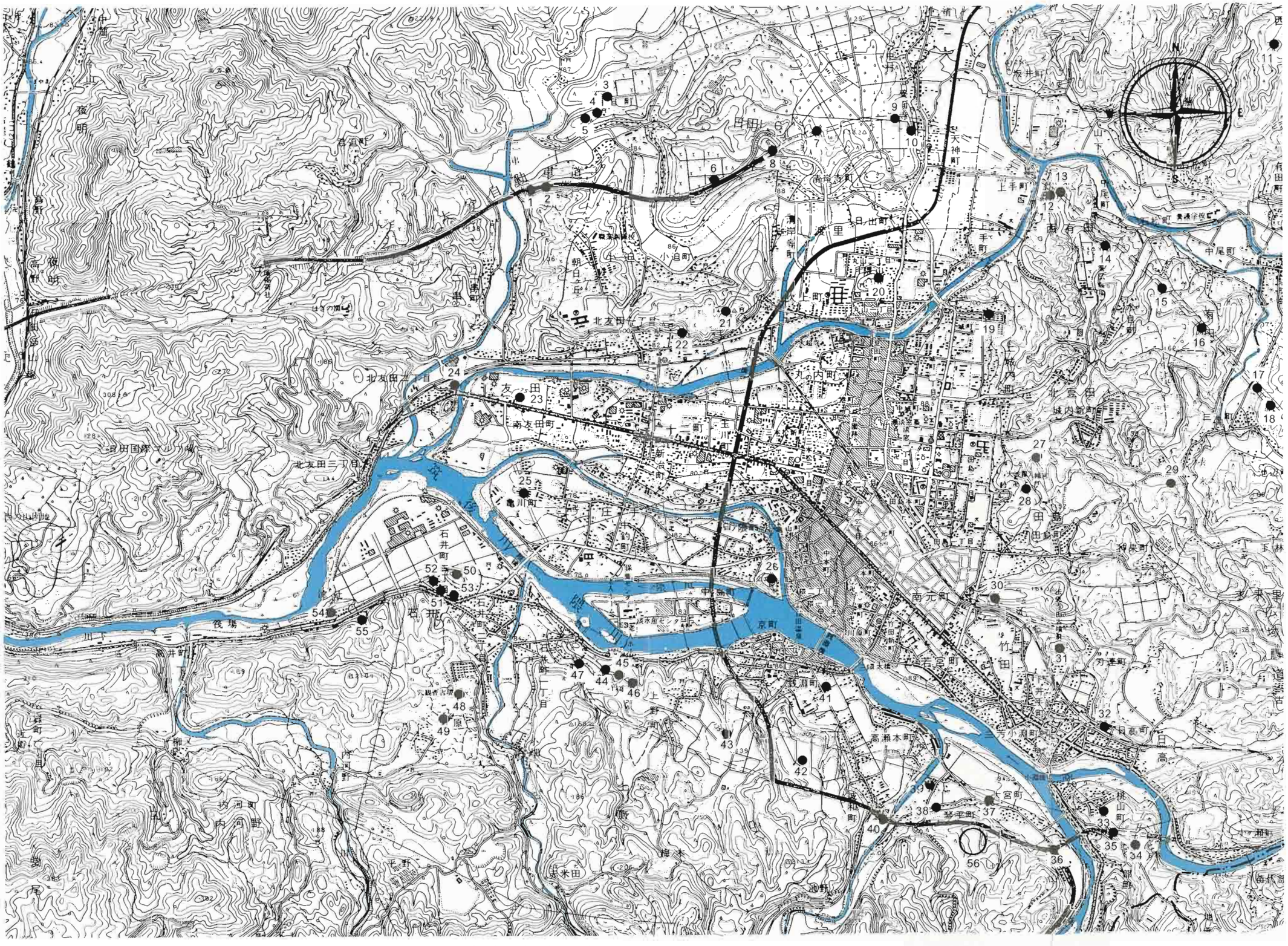
日田市は大分県西部にあり、九州全体から見た場合ほぼ中央に位置する。三隈川などの河川が集中する沖積地の周辺には河岸段丘や「原（はる）」と呼ばれる台地が広がり、日田盆地の地形を特徴づける。遺跡の多くはその場所に立地している。三隈川南岸は、長者原台地からなる石井地区、銭渕・高瀬段丘とその背後の陣ヶ原台地からなる高瀬地区、三隈川と大山川に挟まれた半島状の台地である大部地区の大きく３つに分けることができる。台地はいずれも沖積地との比高差約30ｍほどで標高は130ｍ台である。しかしながら、今回調査した口が原遺跡は高瀬地区にあたり標高155ｍ前後と他の台地より一段高い位置にあるため、それらの台地上で確認されている遺跡と比較した場合どのような様相を示しているのか注目するところであった。

この三隈川南岸には日田盆地全体の遺跡立地と共通する多くの遺跡がある。（第２図）台地上には旧石器・縄文時代の遺跡が点々と残されており、長者原遺跡（49）では縄文早期、上野第１遺跡（43）では縄文晩期の遺跡を確認している。口が原遺跡の眼下に通っている国道210号バイパス建設時の調査では手崎遺跡において縄文早前後晩期の遺物・遺構が確認され、大部遺跡でも縄文早晩期の遺物が確認されている。また長者原と陣ヶ原台地の縁辺部には弥生時代の集落が広がっている。古墳時代になると集落の中心は台地を下って、石井沖積地や高瀬段丘に移動するようで、高瀬地区では高瀬遺跡（40）と手崎遺跡で竪穴住居跡が確認されている。台地縁辺部は古墳時代には墓地として利用されていたらしく、護願寺古墳群（44～46）、穴観音古墳（48）などが台地上に立地する。

また、沖積地にはガランドヤ古墳群（51～53）、高瀬段丘上には姫塚古墳（41）、桃山台地には千人塚古墳（33、34）が存在しており、律令国家によって石井郷として設定されるまとまりが以上の古墳群の存在によって示される。

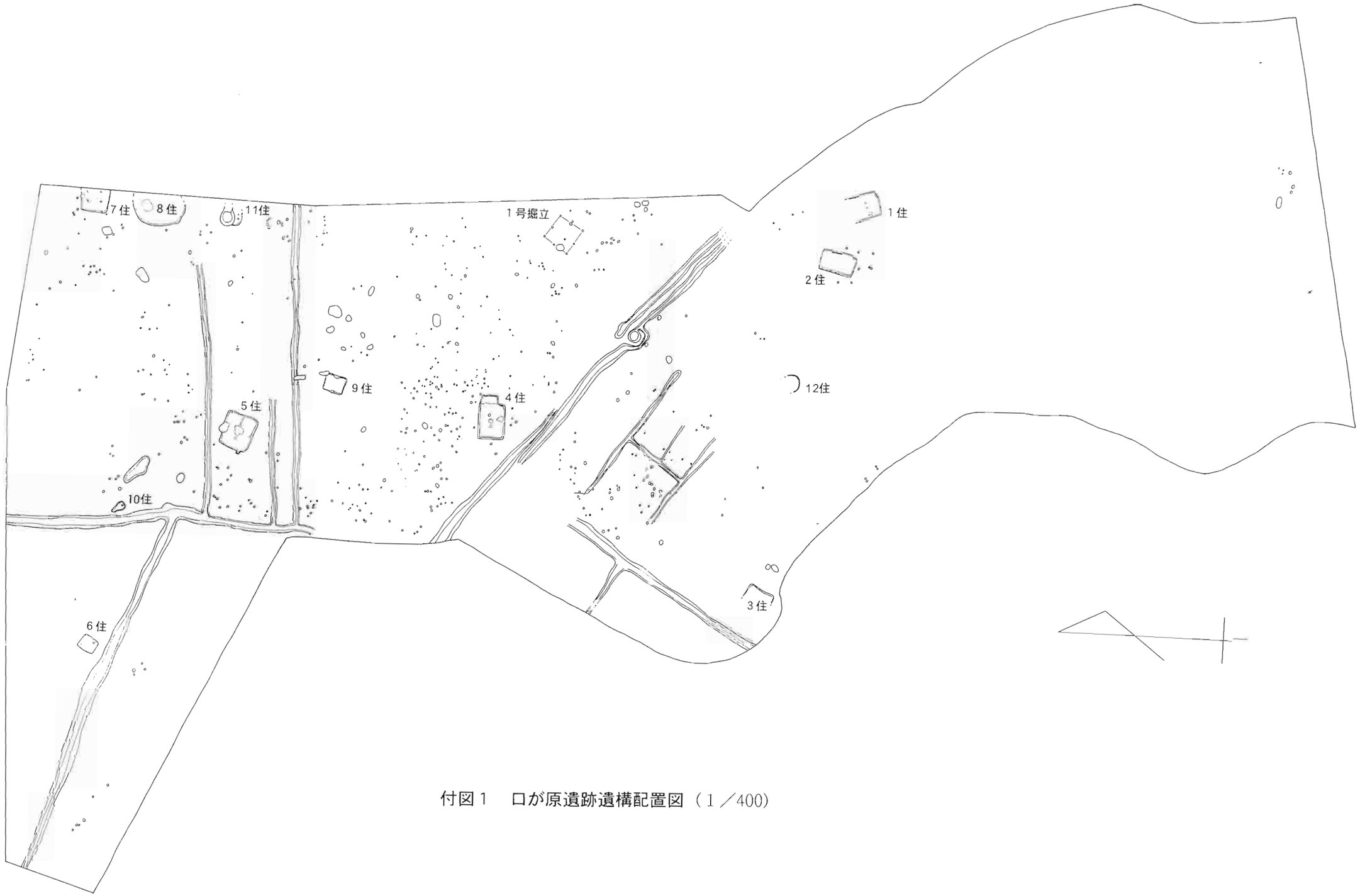
奈良時代（８世紀）には、石井駅が郷内におかれていたとされるが、この時代の遺構としては上野第１遺跡や高瀬段丘上の条里遺構、手崎遺跡（36）が知られている。

『上野第１遺跡』（一般国道210号日田バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要）大分県教育委員会　1991
『手崎遺跡・大部遺跡』（　同　上　）大分県教育委員会　1992
『（日田市高瀬遺跡群の調査１）誠和神社裏遺跡・後藤家墓地・陣ヶ原辻原遺跡・高瀬深ノ田遺跡』
大分県教育委員会　1995
千田　昇「日田・玖珠地域の地形」『日田・玖珠地域－自然・社会・教育』　大分大学教育学部　1992
田中裕介「日田盆地三隈川南岸の考古学からみた開発史」『大分県地方史』154　大分県地方史研究会　1994



1．小迫古墳
2．小迫横穴墓群
3．朝日宮ノ原遺跡
4．天満１号墳
5．天満２号墳
6．小迫辻原遺跡
7．草場第１遺跡
8．草場第２遺跡
9．後迫遺跡
10．羽野横穴墓群
11．西有田赤ハゲ遺跡
12．夕田横穴墓群
13．夕田古墳
14．佐寺原遺跡
15．堂園遺跡
16．大迫遺跡
17．尾漕遺跡
18．尾漕１号墳
19．慈眼山瀬戸口遺跡
20．月隈横穴墓群
21．吹上遺跡
22．北友田横穴墓群
23．荻鶴遺跡
24．三郎丸古墳
25．徳瀬遺跡
26．日隈古墳
27．赤迫遺跡
28．薬師堂山古墳
29．馬形遺跡
30．鳥羽塚古墳
31．法恩寺山古墳群
32．東寺横穴墓群
33．千人塚１号墳
34．千人塚２号墳
35．大部遺跡
36．手崎遺跡
37．大宮遺跡
38．惣田遺跡
39．惣田塚古墳
40．高瀬遺跡
41．姫塚古墳
42．陣が原辻原遺跡
43．上野遺跡
44．護願寺１号墳
45．護願寺２号墳
46．護願寺３号墳
47．寺内遺跡
48．穴観音古墳
49．長者原遺跡
50．隈山遺跡
51．ガランドヤ１号墳
52．ガランドヤ２号墳
53．ガランドヤ３号墳
54．津辻１号墳
55．津辻２号墳
56．口が原遺跡

第２図　口が原遺跡周辺遺跡分布図（１／25,000）



付図１　口が原遺跡遺構配置図（１／400）

第３章　口が原遺跡発掘調査の概要

１．竪穴住居跡

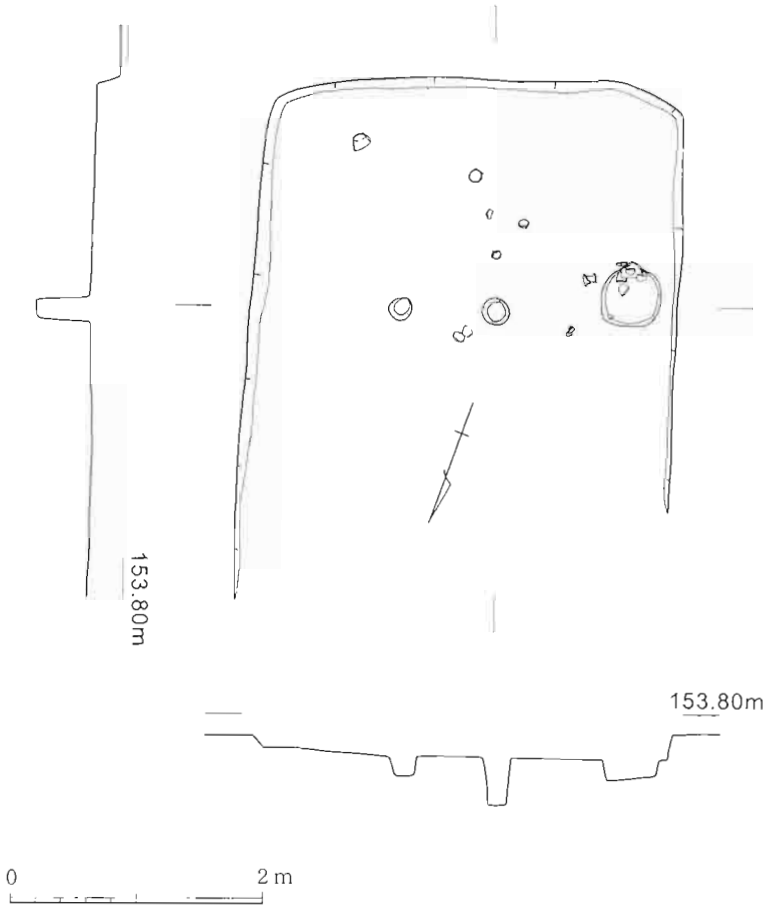
今回の調査では12軒の竪穴住居跡が検出された。

§１号住居跡（第３図）

調査区南側の緩斜面に位置している。住居跡は方形プランを呈しており、規模は2.00ｍ×4.50ｍ、最大深25cmで北側は削平を受けていた。主柱穴は２本でわずかに東側に偏って設けられている。主柱穴の軸上西側に並列する屋内土坑が検出され、土坑内には２個体分の高坏のほか甕などが出土した。住居跡中央には、焼土および炭化物が散面していた。

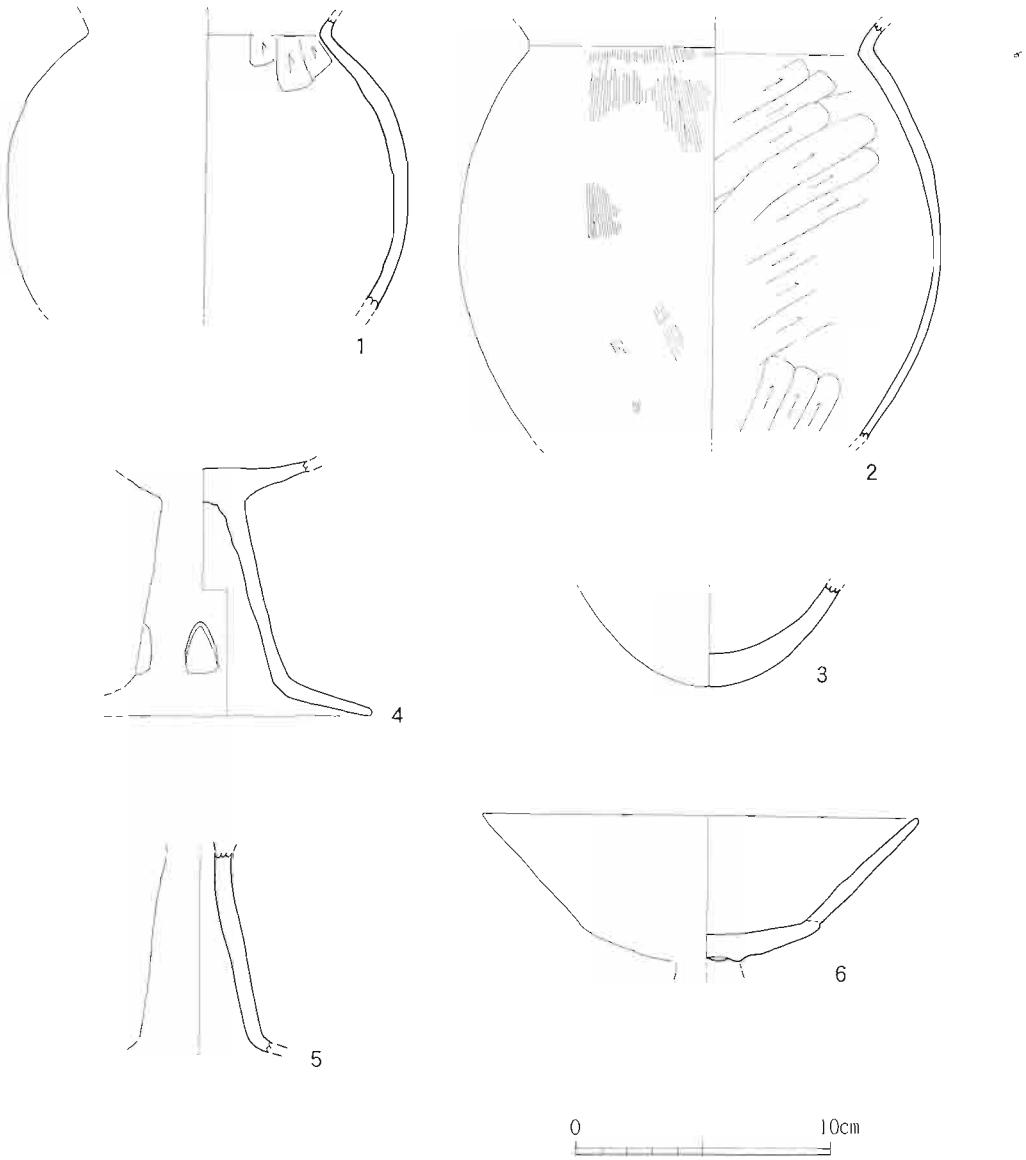
§１号住居跡出土遺物（第４図）

１は甕の胴部で内外面とも淡褐色を呈している。外面は調整は不明で、内面胴部上半より頸部にかけてケズリ調整が残っている。遺存高は10.0cmを測る。２は甕で外面は褐色、内面は淡褐色を呈



第３図　１号住居跡実測図（１／60）

している。調整は外面がハケ、内面はケズリを施している。遺存高は16.5cmを測る。３は甕の底部で丸底である。色調は黄褐色を呈している。遺存高は4.0cmを測る。４は高坏の脚部である。色調は、淡黄褐色を呈し、胎土は角閃石、石英、白色粒を含む。調整は不明である。下半部４ヵ所の透かしを設けているが、対角の位置より少しズレている。遺存高は9.8cmを測る。５は高坏の脚部である。色調は黄褐色を呈し、胎土は角閃石、白色粒、茶色粒を含む。遺存高は7.8cmを測る。６は高坏の坏部である。色調は橙色を呈し、胎土は角閃石、白色粒を含む。復元口径は17.0cm、遺存高は5.7cmを測る。



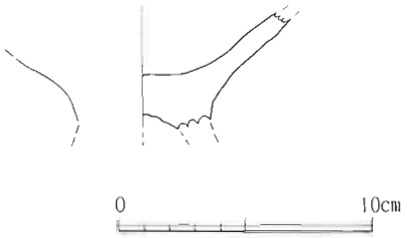
第４図　１号住居跡出土遺物実測図（１／３）

§２号住居跡（第６図）

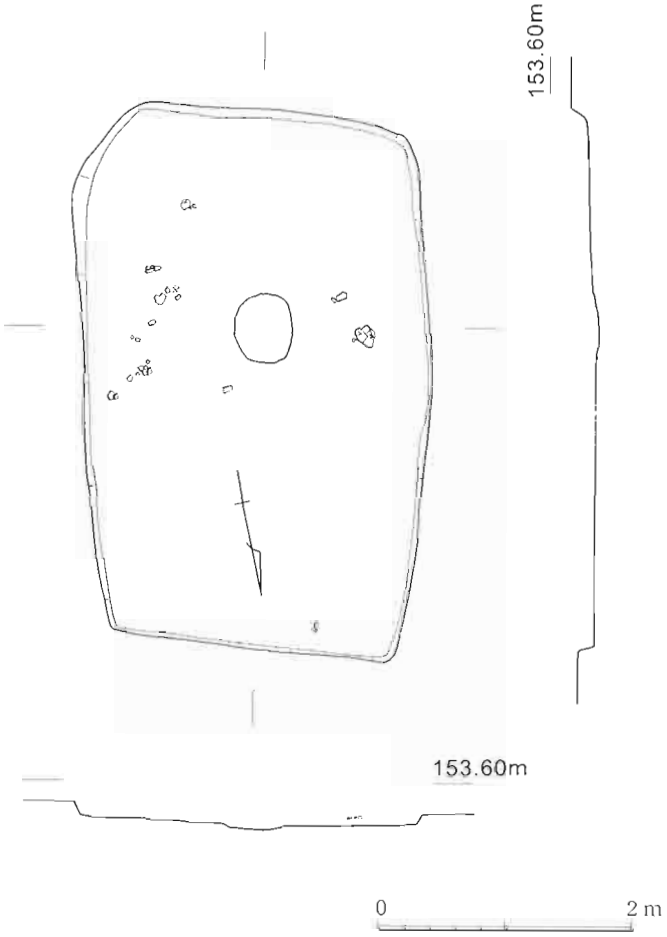
１号柱の西側に位置している。平面プランは長方形で、全体が大きく削平を受けている。規模は検出時で4.20m×2.75m、深さはわずかに10cmを測るのみである。中央に炉跡が検出されたが、柱穴を確認することはできなかった。出土遺物は、甕の破片が多く出土したが図化できなかった。

§２号住居跡出土遺物（第５図）

台付甕の底部である。内外面とも淡黄褐色を呈している。胎土は角閃石、茶色粒を含む。遺存高は4.5cmを測る。



第５図　２号住居跡出土遺物実測図（1／３）



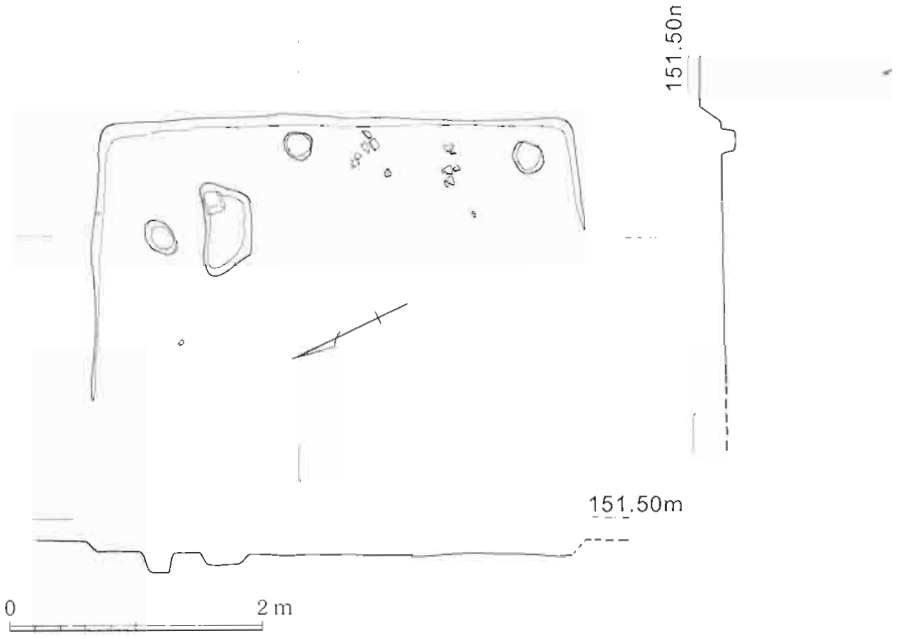
第６図　２号住居跡実測図（１／60）

§３号住居跡（第７図）

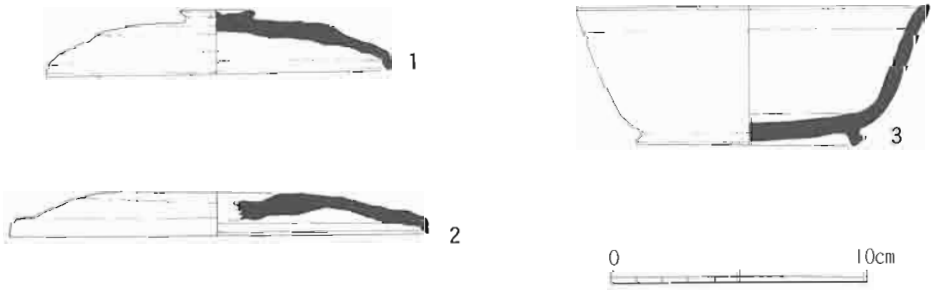
調査区西側の谷斜面に面した所で検出された。平面プランは方形で西側は大きく削平を受けている。規模は2.00ｍ×1.50ｍ、最大深は10cmを測る。柱穴は３ヵ所検出されたがいずれも主柱穴にはなり得ない。東壁際で須恵器が出土している。

§３号住居跡出土遺物（第８図）

１は須恵器蓋である。法量は復元口径13.5cm、高さは2.6cmを測る。外面は黒灰色、内面は灰色を呈し、擬似宝珠形つまみを有している。２は須恵器蓋である。法量は口径16.5cm、高さは1.6cmを測る。内外面ともに淡青灰色を呈する。焼き歪みが大きい。３は高台付坏である。法量は復元口径13.8cm、高さは5.5cmを測る。外面は青灰色、内面は赤褐色を呈する。



第７図　３号住居跡実測図（１／60）



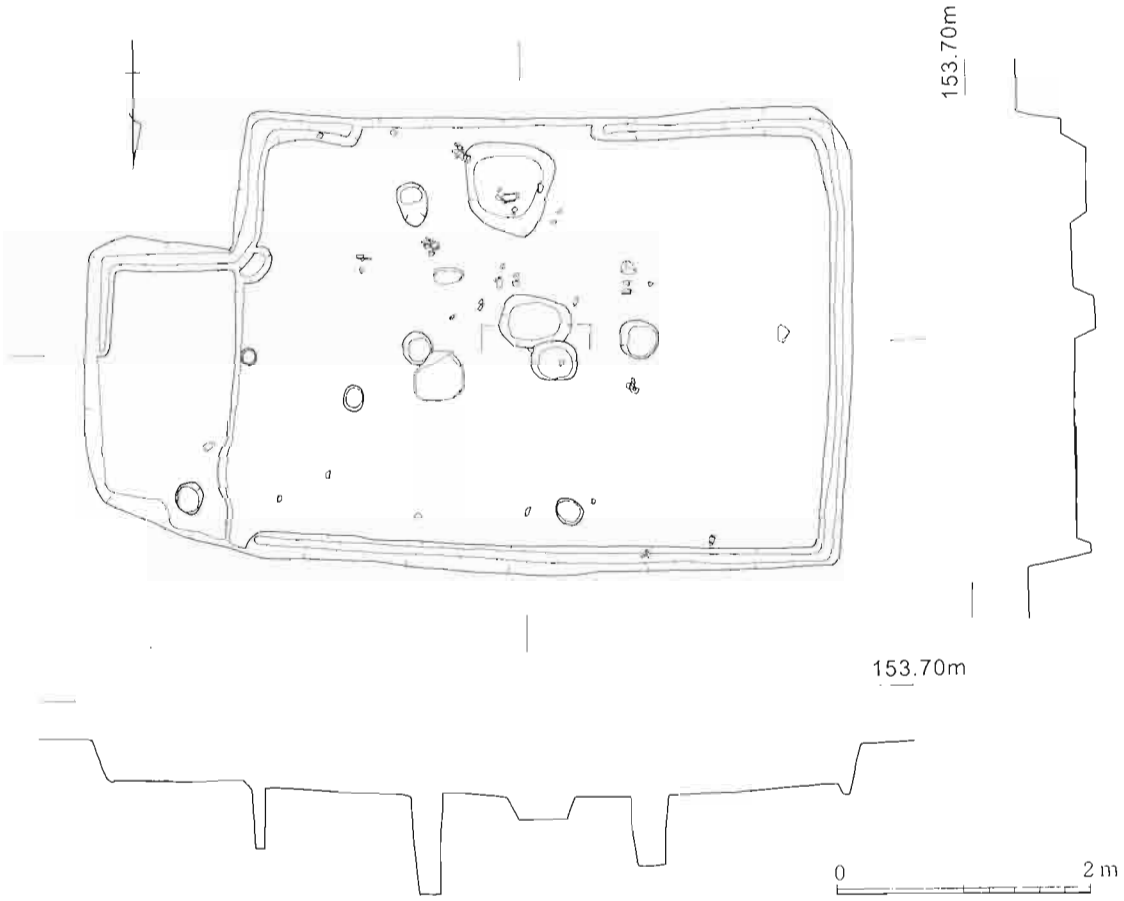
第８図　３号住居跡出土遺物実測図（１／３）

§４号住居跡（第９図）

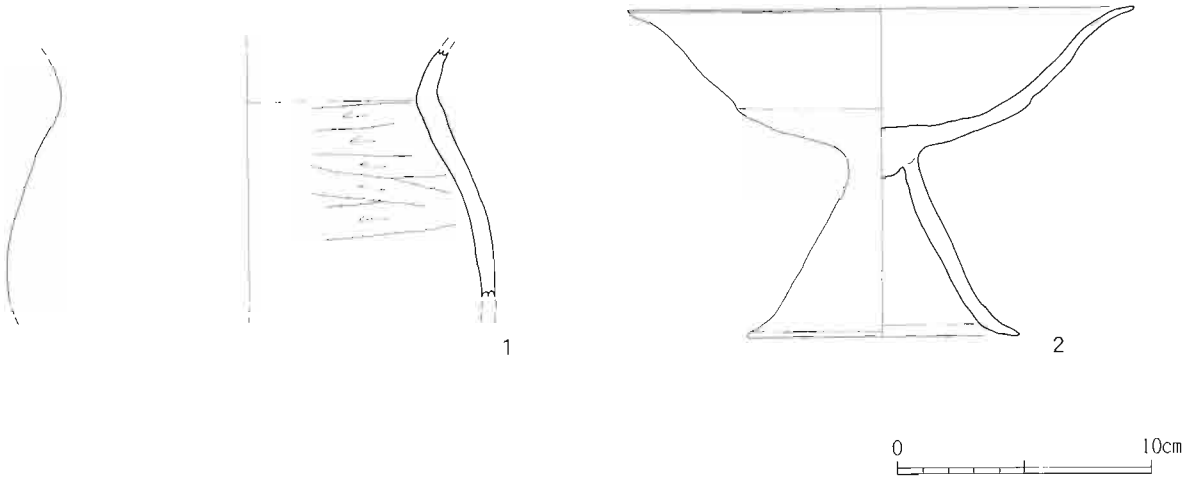
調査区中央に位置している。平面プランは方形で東側に張り出し部を設けている。規模は6.05m×3.60m、最大深は40cmを測る。他の住居跡より高い位置にあるため比較的遺存状況はよかった。構造は主柱穴２本の建物である。ほぼ全周に壁溝を有しており、張り出し部は８cmほど高くなっている。また、南壁際に屋内土坑を設けており、坑内には高坏ほか数点の土器が出土した。

§４号住居跡出土遺物（第10図）

１は甕の胴部である。内外面とも赤褐色を呈し、胎土は角閃石、石英、茶色粒を含む。外面調整は不明だが、内面は横方向のケズリを施している。遺存高は9.8cmを測る。２は高坏である。脚の一部を欠くがほかは完存である。調整は不明である。法量は口径が20cm、復元底径は10.7cm、高さは13cmを測る。口縁部が外反するところに特徴がある。



第９図　４号住居跡実測図（１／60）



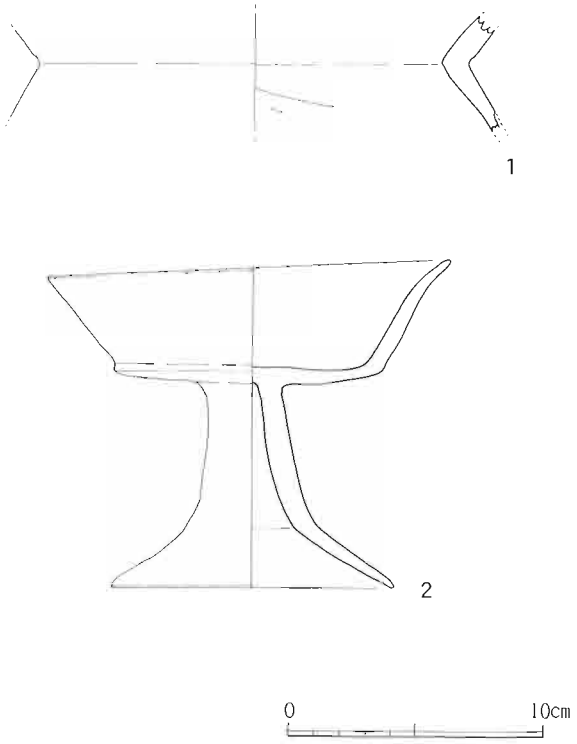
第10図　４号住居跡出土遺物実測図（１／３）

§５号住居跡（第12図）

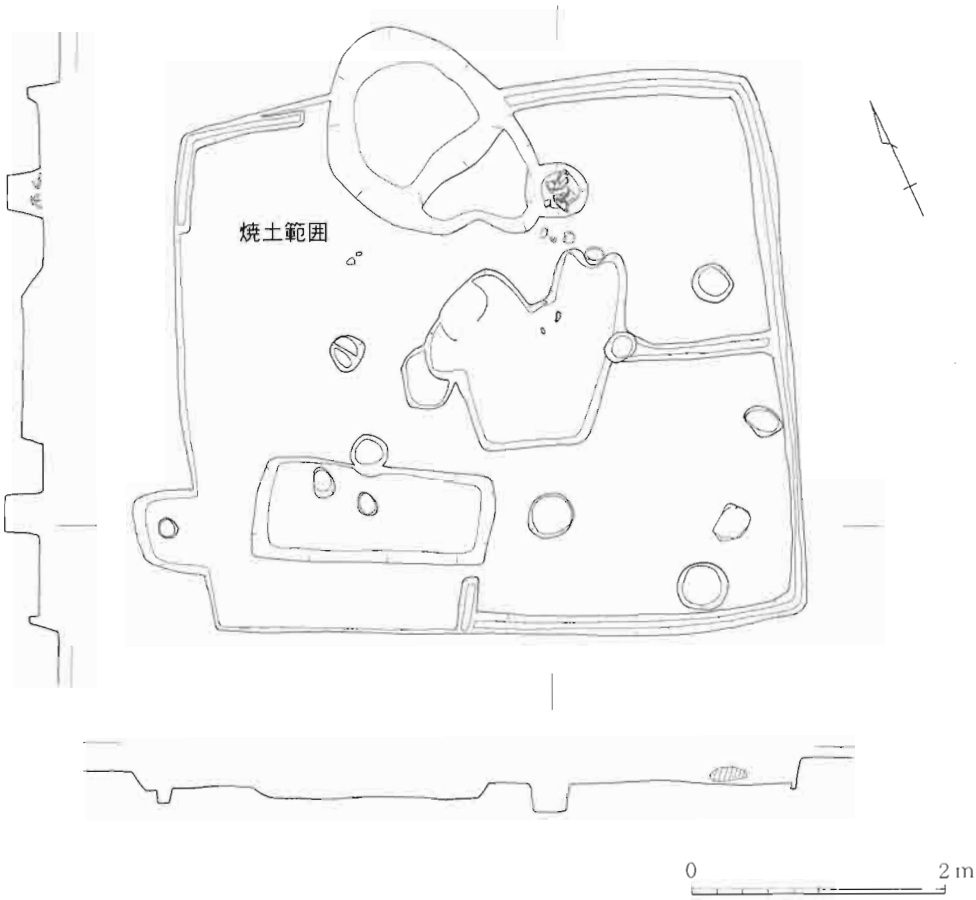
調査区中央に位置している。平面プランは方形で、一部攪乱を受けている。規模は4.80ｍ×4.30ｍ、最大深35cmを測る。主柱穴は２本である。西側の一部をのぞき、ほぼ全周に壁溝を設けている。また、東側から中央に向けてしきり溝があり、中央には土坑を有している。

§５号住居跡出土遺物（第11図）

１は甕の頸部である。内外面とも褐色を呈し、胎土は角閃石、白色粒を含む。外面調整は不明だが、内面には横方向のケズリが施されている。２は高坏である。色調は淡黄褐色を呈し、胎土は角閃石、白色粒、茶色粒を含む。内外面とも摩滅がひどく調整は不明である。口径は約16cm、高さ13cmを測る。



第11図　５号住居跡出土遺物実測図（１／３）



第12図　５号住居跡実測図（１／60）

§６号住居跡（第13図）

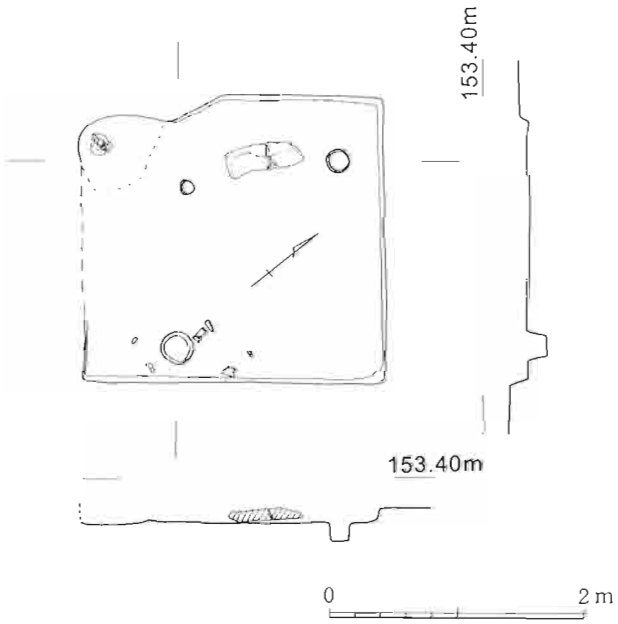
調査区北西に位置し、他の遺構とは少し離れた場所に構築されている。平面プランは方形で、規模は約2.05m×2.20m、南側を大きく削平されており深さは最大で15cmを測るのみである。柱穴は検出されたが主柱穴にはなり得ない。

§６号住居カマド（第14図）

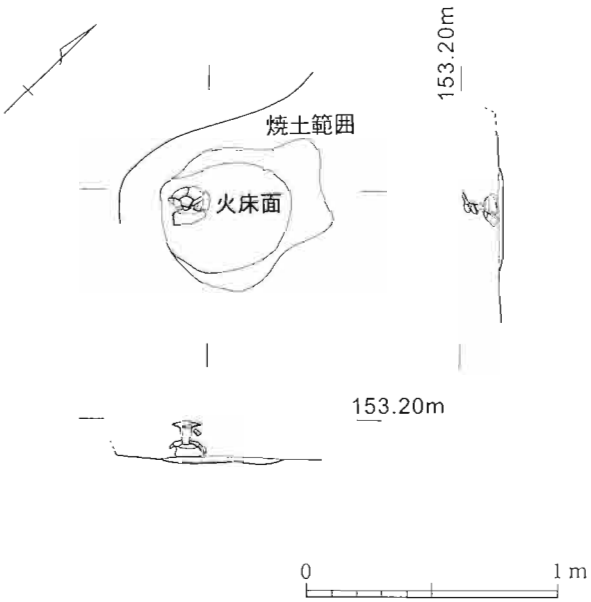
住居跡の南西隅に設けられていた。支脚は高坏を倒立させて用い床に固定されている。火床面はおよそ50cmの範囲でほぼ円形を呈している。

§６号住居跡出土遺物（第15図）

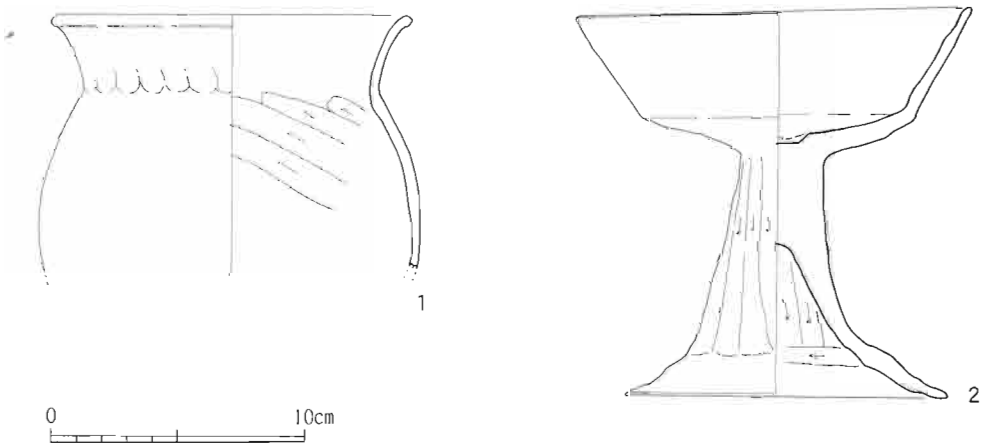
１は甕である。色調は赤褐色を呈し、胎土は角閃石、石英を含む。調整は胴部内面にケズリ調整を施している。復元口径は13.8cm、遺存高は10.0cmを測る。２は高坏である。色調は全体に赤褐色を呈しているが支脚に転用されていたため被熱により変色し、またススが付着している。胎土はわずかに白色粒を含むが総じて精緻である。調整は坏部において丁寧なナデ調整をみることができるほか、脚部外面に丁寧なタテ方向ケズリが施され、また脚部内面にはヨコ方向のケズリが施されている。形態の特徴は坏部の稜が明確であることや坏底部から口縁部にむかって直線的に伸びたのち端部に近いところでわずかに膨らみをもつ。



第13図　６号住居跡実測図（１／60）



第14図　６号住居跡カマド実測図（１／30）



第15図　６号住居跡出土遺物実測図（１／３）

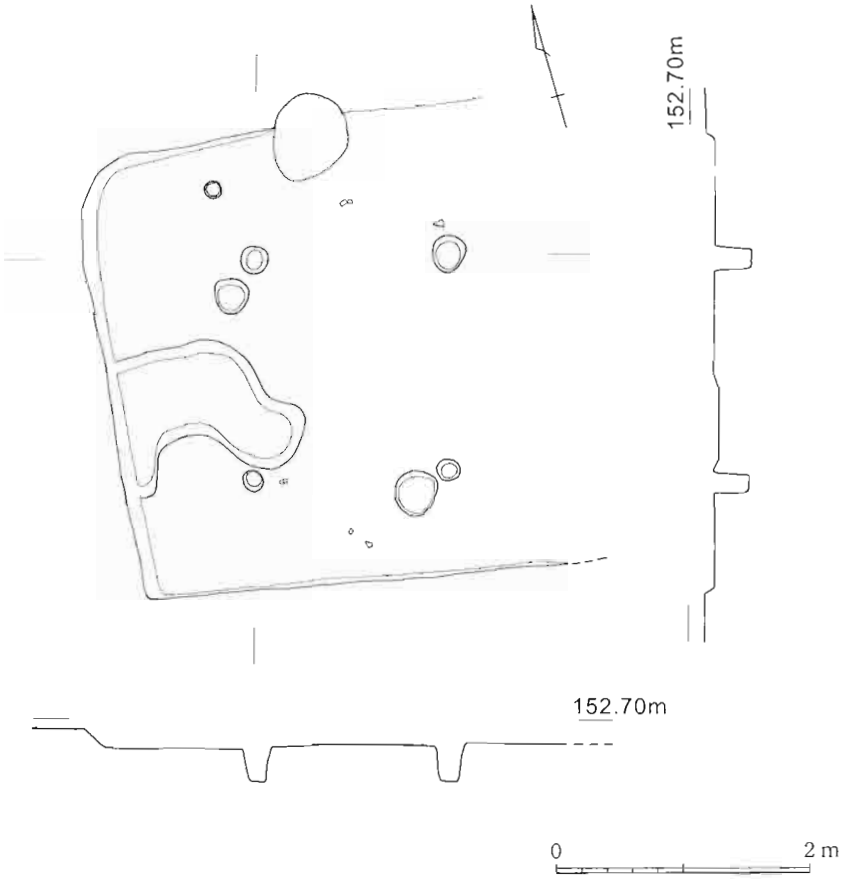
§７号住居跡（第16図）

調査区東側の谷斜面に面した台地の端に位置している。平面プランは方形で規模は3.80m×2.90m、深さは最大で20cmを測る。東側は削平を受けているため全体のプランを確認することはできなかった。

§７号住居跡カマド（第17図）

北壁に設けられた北向きのカマドである。ほぼ東西壁間の中央部に構築されている。カマド奥壁は、住居跡の壁よりわずかに外に張り出すタイプである。

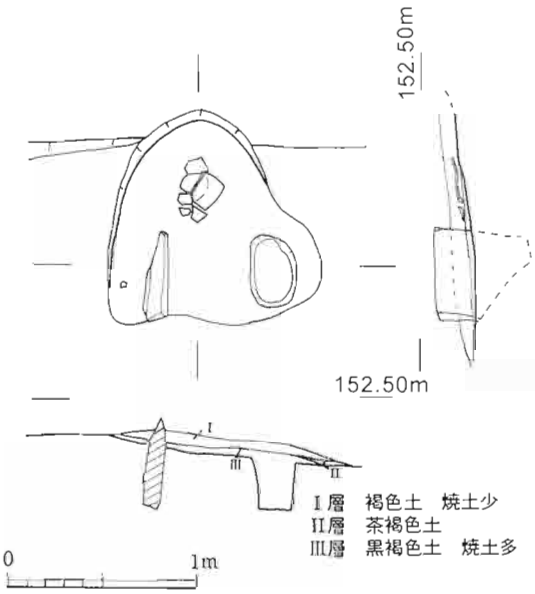
上部施設はすでに削平され残っていないが、片側の袖石（そで）が確認されたほか東側で袖石の抜き取り痕が検出された。



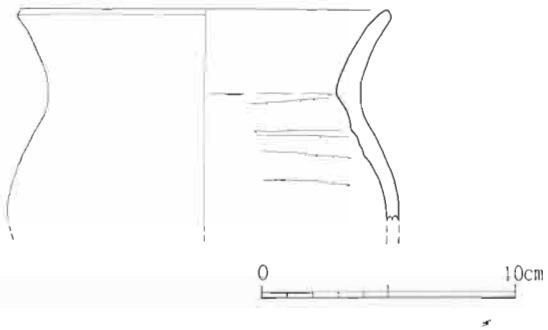
第16図　７号住居跡実測図（１／60）

§７号住居跡出土遺物（第18図）

甕の一部である。色調は内外面とも赤褐色で、胎土は角閃石、白色粒、茶色砂粒を含む。内面の頸部から胴部にかけて横方向のケズリが施されている。復元口径14.4cm、遺存高8.3cmを測る。



第17図　７号住カマド実測図（１／40）



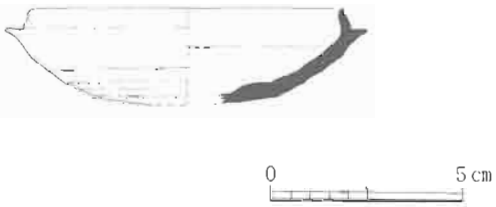
第18図　７号住居跡出土遺物実測図（１／３）

§８号住居跡（第20図）

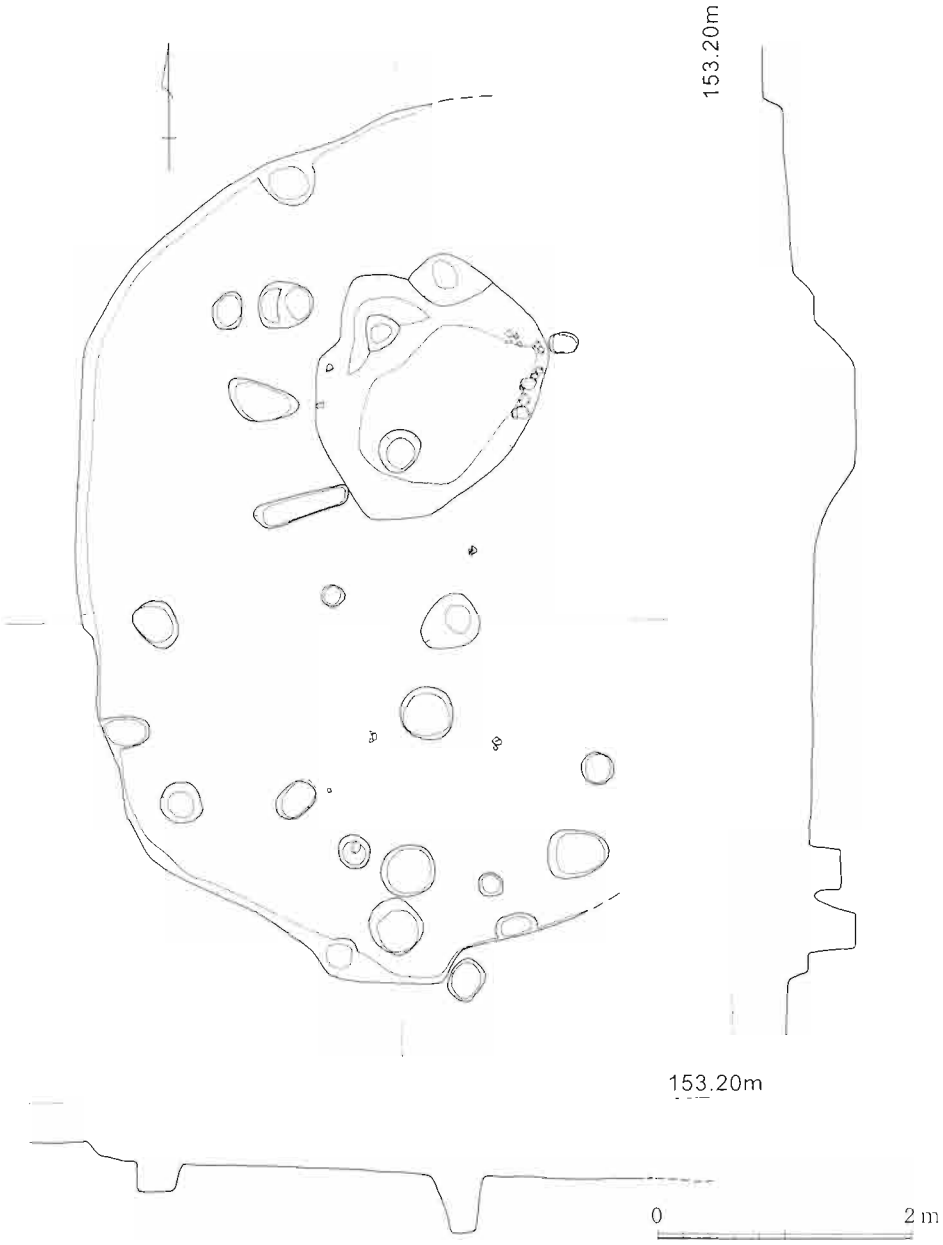
調査区東端部に位置している。平面プランは楕円形で4.50m×4.00m、最大深20cmを測る。柱穴は多数確認されたが主柱穴を断定することはできなかった。ほぼ中央に不整形な土坑をもちこぶし大くらいの礫を有していた。出土した須恵器および土師器の甕は、後の流れこみによるものと考えられ、小片ではあるが弥生土器の壺で胴部の刻み目突帯部が床面より出土している。

§８号住居跡出土遺物（第19図）

須恵器坏身で遺構検出時に埋土より出土した。法量は口径14.2cm、受け部径12.2cm、高さ3.8cmに復元される。色調は内外面ともに青灰色を呈している。



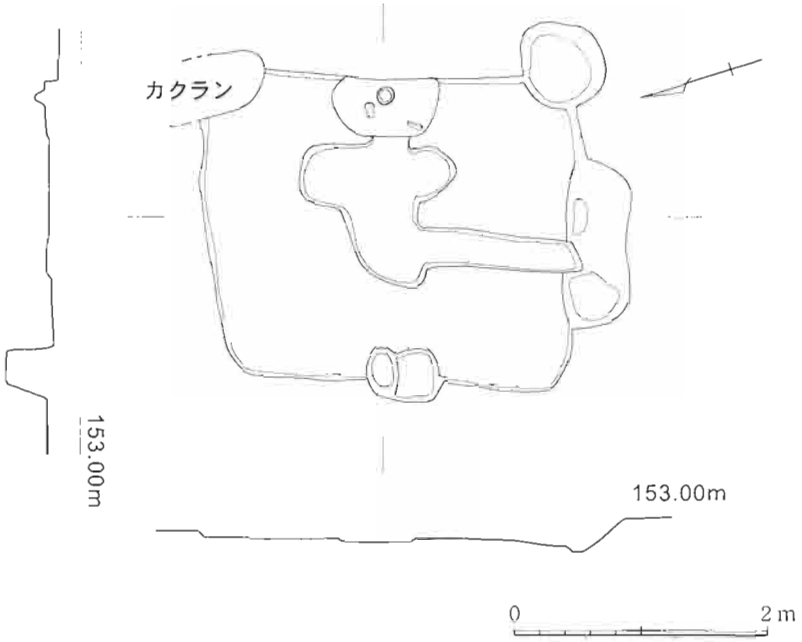
第19図　８号住居跡出土遺物実測図（１／３）



第20図　8号住居跡実測図（1／60）

§9号住居跡（第21図）

調査区中央東側に位置している。平面プランは方形で3.30m×2.80m、最大深10cmを測る。東壁よりに屋内土坑を有している。柱穴は確認されなかった。出土遺物はなし。



第21図　9号住居跡実測図（1／60）

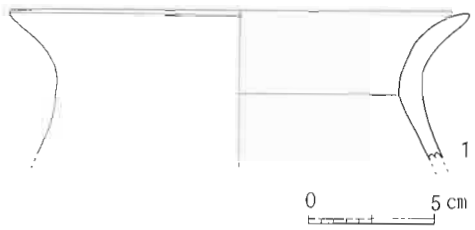
§10号住居跡（第22図）

調査区北側に位置している小竪穴遺構である。平面プランは不整形で規模は2.20m×1.10m、深さは最大で15cmを測る。北側の狭小な場所に焼土が多く堆積しており、カマドが設けられていたと考える。また焼土堆積部はわずかに掘りくぼめられている。カマドの逆方向に柱穴が確認された。

第22図　10号住居跡実測図（1／40）

§10号住居跡出土遺物（第23図）

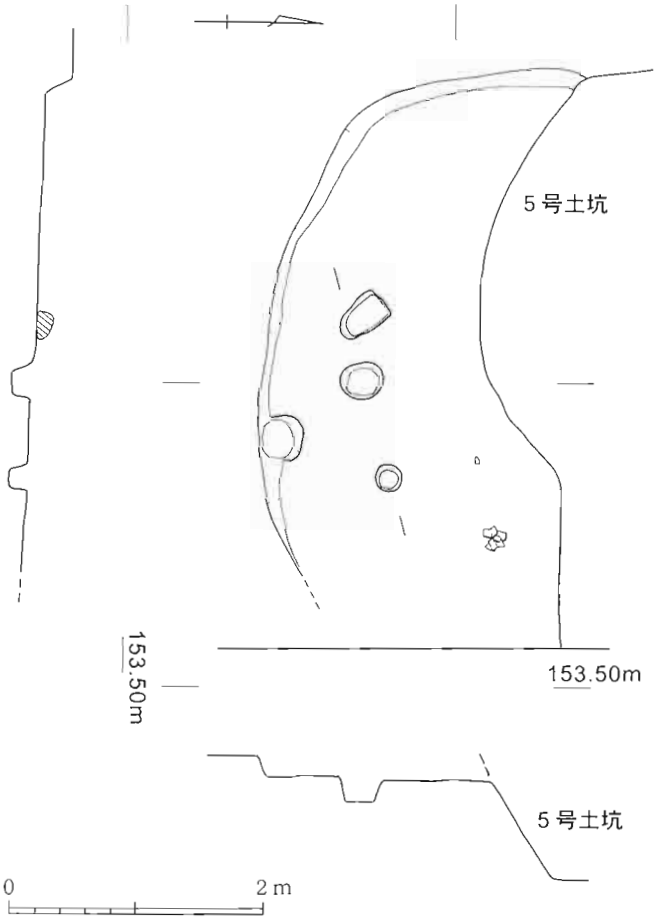
1は甕である。色調は濃褐色を呈し、胎土は角閃石、石英、褐色粒を含む。調整は不明である。復元口径は18.0cm、遺存高は5.7cmを測る。



第23図　10号住居跡出土遺物実測図（1／3）

§11号住居跡（第24図）

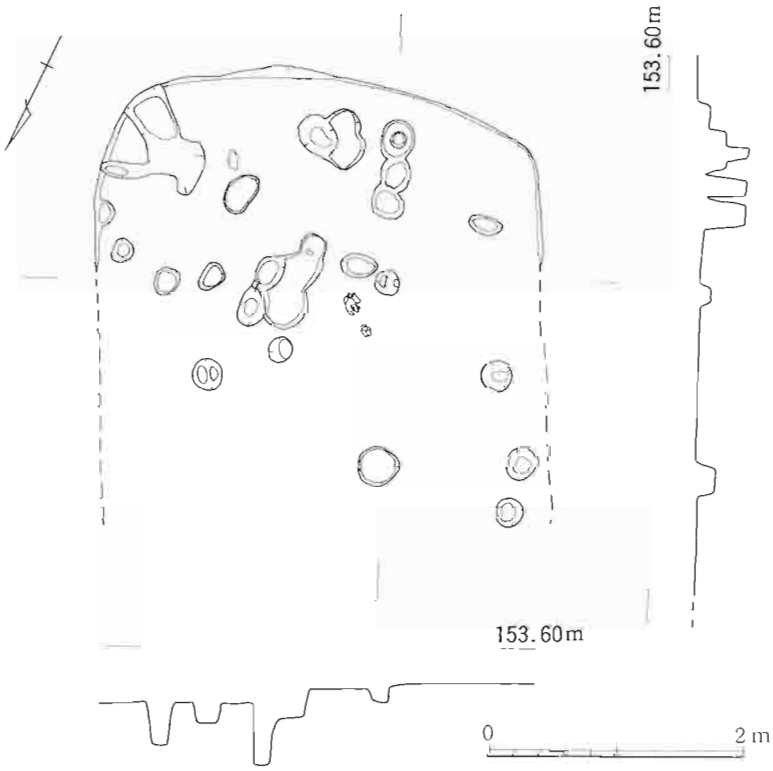
調査区東側に位置している。北側を5号土坑に大きく削平されているため全容を把握することはできないが方形プランを呈していたと思われる。遺物は床直上に甕の破片が数点出土しており、図化できないものの内面にケズリ調整が施されている。



第24図　11号住居跡実測図（1／60）

§12号住居跡（第24図）

調査区南側中央で検出された。遺構は大きく削平を受けており、立ち上がりはほとんど確認することができなかった。柱穴は多数検出されたが、主柱穴になり得るものは断定できなかった。床面直上よりカマド構築物と思われる粘土塊が多く出土している。



第25図　12号住居跡実測図（1／60）

第26図　12号住居跡出土遺物実測図

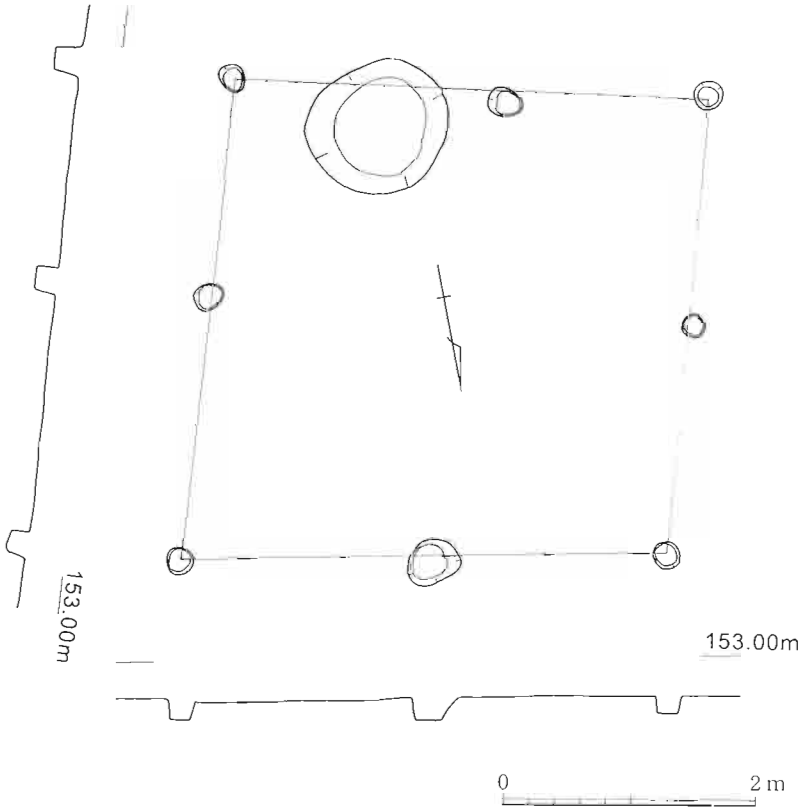
§12号住居跡出土遺物（第26図）

１は甕である。色調は赤褐色を呈し、胎土は角閃石、石英、赤褐色粒を含む。内面には横方向のケズリが施されている。復元口径12.0cm、遺存高11.5cmを測る。２は粘土塊である。住居跡全域で検出されたものの一部で、被熱を受けている。外面は粗いケズリを施している。カマドの構築物ではないかと思われるが、もしそうであるとしてもどの部分を構成するものかは不明である。図化した遺物については上下が逆の可能性もある。

２．掘立柱建物

§１号掘立柱建物（第27図）

調査区中央の東端に位置している。規模は東西に棟行をとる２間×３間である。建物の向きは長軸方向を北からみて約30度東向きである。柱穴掘方はすべて平面円形で径20～30cm、深さは検出時で約20～30cmを測る。



第27図　１号掘立柱建物実測図（１／60）

3．土　坑

§１号土坑（第28図）

調査区の北側に位置し、約120×50cmの不整形の土坑である。深さは最大で約30cmを測る。底面は東側に緩やかに傾斜している。出土遺物の中で図化できるものは１点である。他には土師器片および黒曜石片が出土している。

§１号土坑出土遺物（第32図）

脚付甕の底部である。色調は淡褐色を呈し、胎土は角閃石、茶色粒を含む。底部内側に指押圧痕が残っている。

§２号土坑（第29図）

調査区中央４号住居跡の東側に位置している方形土坑である。規模は約190cm×125cm、深さは最大で20cmを測る。出土遺物なし。

§３号土坑（第30図）

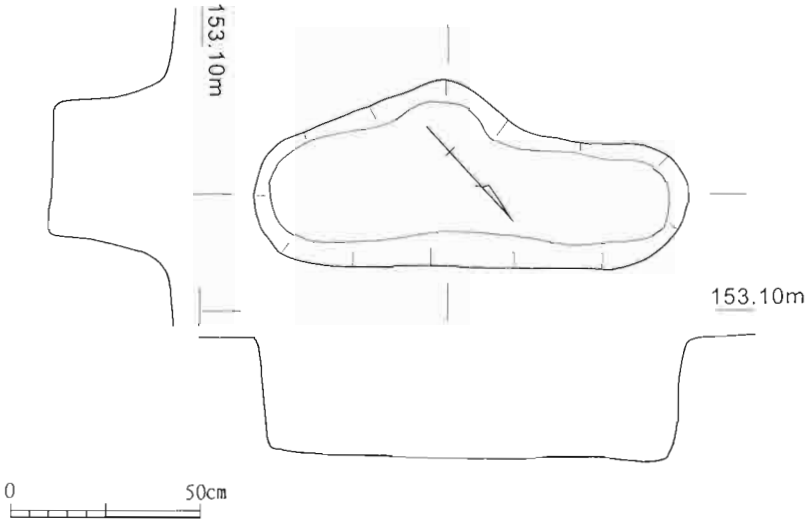
調査区中央９号住居跡の北側に位置している長方形土坑である。規模は約170cm×70cm、深さは最大で20cmを測る。

§３号土坑出土遺物（第33図）

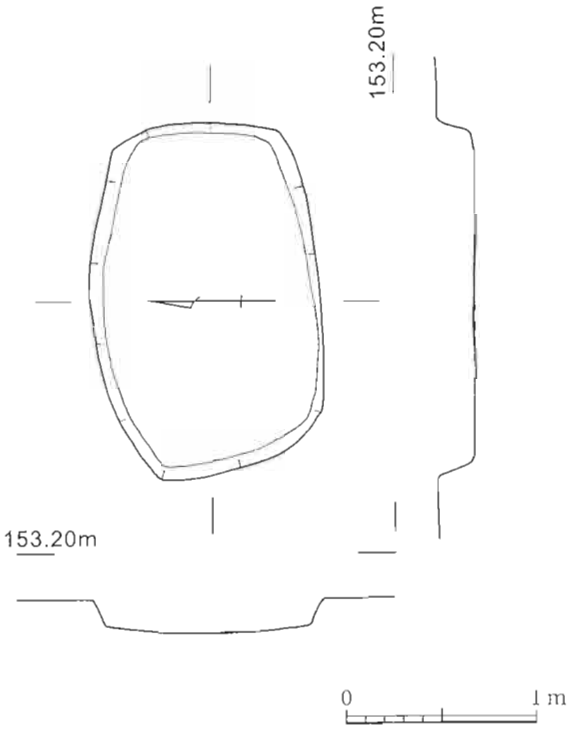
土師器の甕底部である。色調は淡赤褐色で、胎土は角閃石、白色砂粒、赤色粒を含む。遺存高3.0cmを測る。

§４号土坑（第31図）

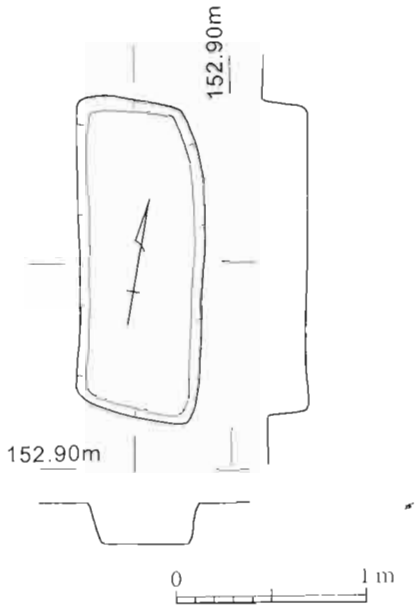
調査区南側の緩斜面に位置している。規模は直径約140cmの円形土坑で、深さは最大で40cmを測る。坑内には、多量の礫とともに鉄製品が出土している。鉄製品は細かく砕けており、図化できないが鉄製釜と思われる。年代は近世以降に属するものと思われる。



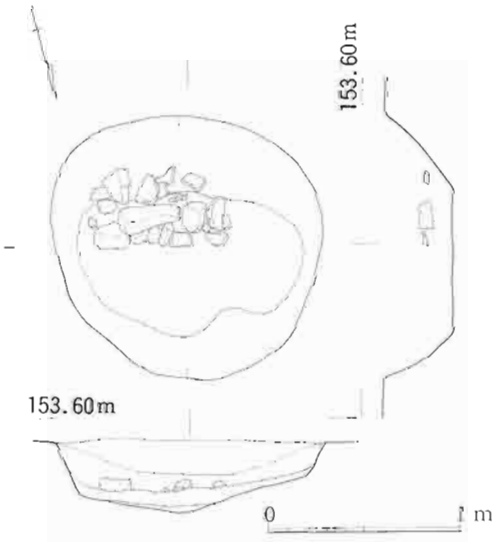
第28図　１号土坑実測図（１／80）



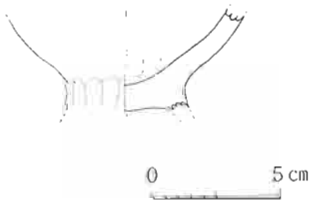
第29図　２号土坑実測図（１／40）



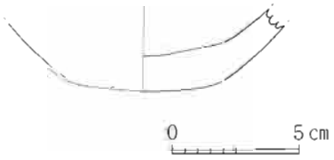
第30図　３号土坑実測図（１／40）



第31図　４号土坑実測図（１／40）



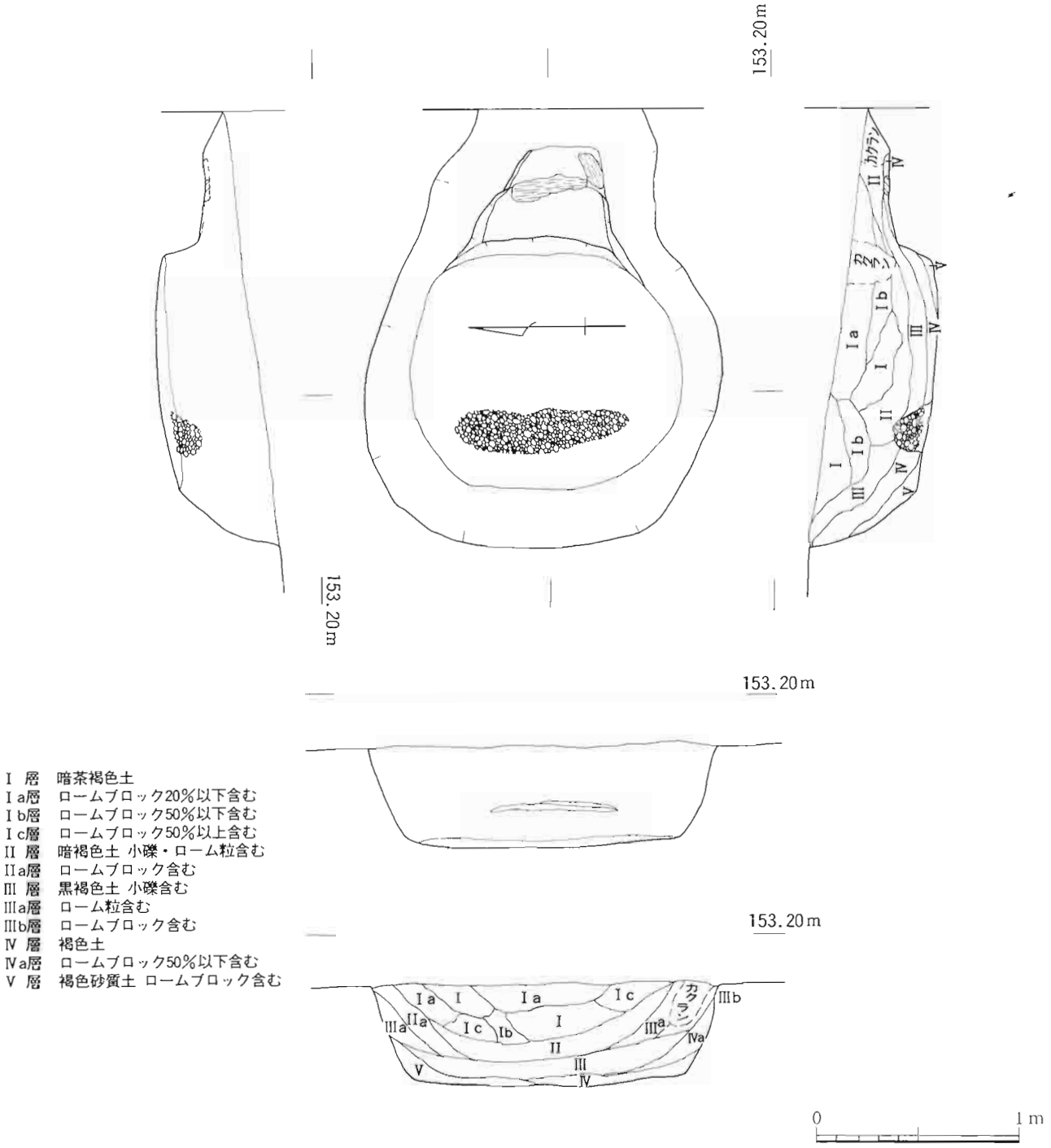
第32図　１号土坑出土遺物実測図（１／２）



第33図　３号土坑出土遺物実測図（１／２）

§５号土坑（第34図）

調査区東側、谷に面した場所に位置している。検出時は、天井部が崩落し黒色土が半ドーナツ状に埋まっていた状況をみることができた。平面プランは馬蹄形で東側に入口部を設けている。規模は奥行2.8m、最大幅2.3mを測る。入口部より主室へは階段状に構築されており、中段の位置に炭化材（約25cmおよび約50cmの２点）が検出された。また、主室の奥側に近い位置に床面より20cmの盛土（褐色砂質土）をし、そのうえに南北に長く自然礫を用いた部分が確認された。何らかの施設を想定できるが、調査中に理解することはできなかった。



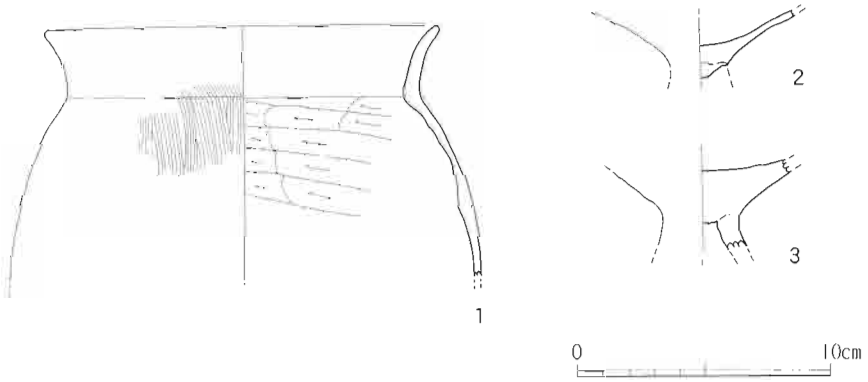
第34図　５号土坑実測図（１／60）

4．その他の遺物（第35・36図）

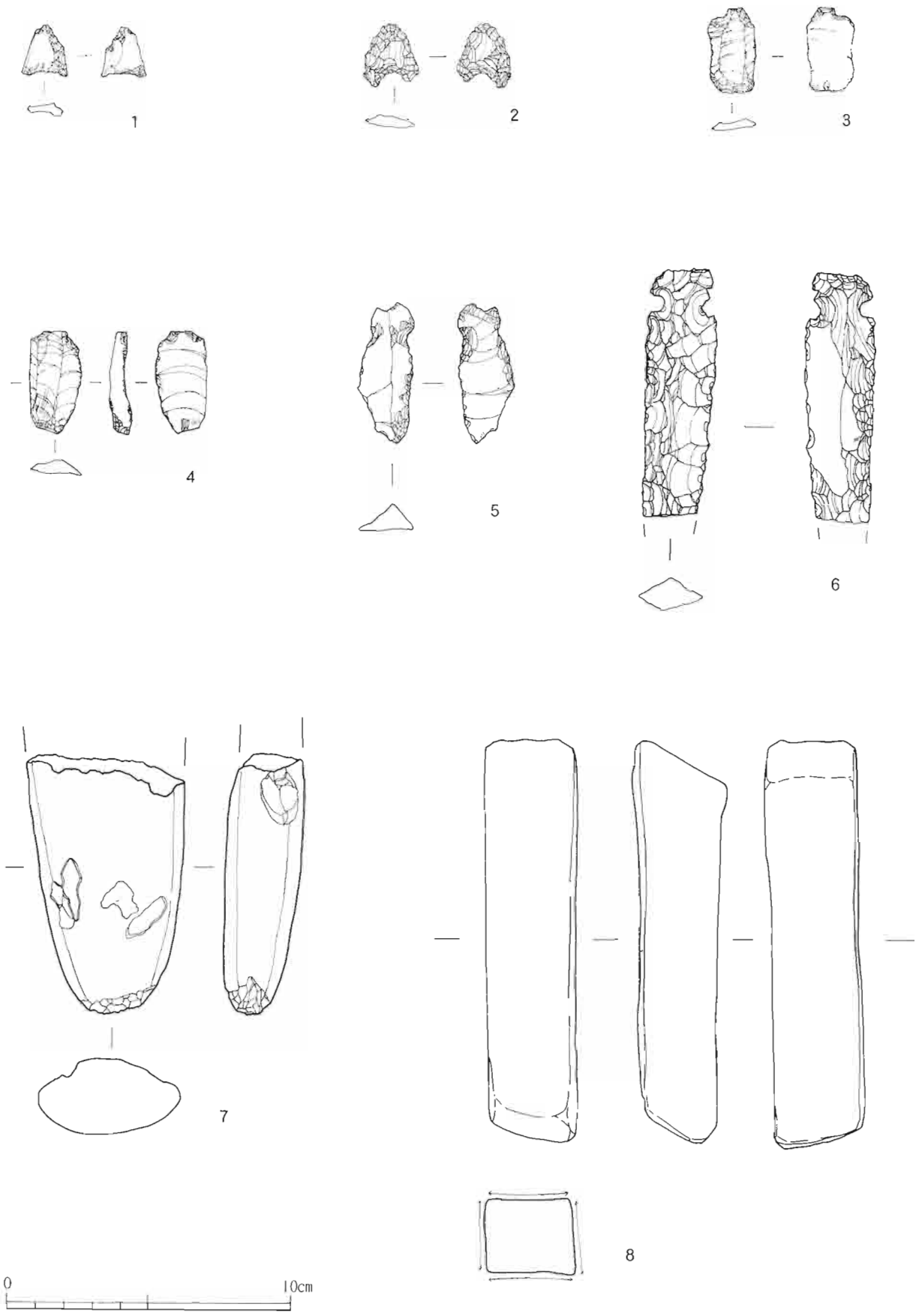
次に示すものは、表土中および遺構検出中に出土した遺物で図化可能なものの一部である。

（土器）１は土師器の甕である。色調は内外面ともに暗茶褐色で、胎土は角閃石、石英および白色砂粒を含む。外面の頸部から胴部にハケ調整を持ち、内面はヨコ方向にケズリを施している。復元口径は15.3cmで、遺存高は10.0cmを測る。２は高坏の坏底部である。色調は内外面ともに淡褐色で胎土は角閃石、石英、白色粒、茶色粒を含む。調整は摩滅がひどく不明である。３は高坏の底部である。色調は淡茶色を呈しており、胎土は角閃石、白色粒、赤茶色粒を含んでいる。遺存高は約3.5cmを測る。

（石器）１は黒曜石製の石鏃である。法量は最大長3.5cm、最大幅2.5cmを測る。２は姫島産黒曜石製の石鏃である。法量は最大長3.5cm、最大幅3.0cmを測る。３は黒曜石の未製品である。４は黒曜石で使用剥離痕を１側面にもつ。５は石匙の未製品で黒曜石製である。法量は最大長5.0cm、最大幅3.0cmを測る。６はサヌカイト製の石匙である。先端部を欠失している。法量は最大長7.5cm、最大幅3.5cmを測る。７は頁岩製の磨製石斧である。基部を欠失している。法量は最大長9.0cm、最大幅5.0cmを測る。８は安山岩製の磨石である。４主面をすべて使用している。法量は最大長14.2cm、最大厚3.0cm、最大高2.7cmを測る。



第35図　その他の遺物（土器）（１）



第36図　その他の遺物・石器（1／2）

Ⅲ　まとめ

１．集落について

調査の結果、竪穴住居跡12軒・堀立柱建物数棟・土坑５基・柱穴などが検出された。このうち竪穴住居跡からは時期の特定可能な甕、高坏などの遺物が出土しており、大きく６期に区分することができる。ただし、２号、11号住居跡が時期が特定できないほか、９号住居跡からは遺物が出土していないためここでは時期区分から外すこととする。

１期は８号住居跡が該当する。図化していないが壺の破片で刻み目突帯を有する胴部が出土しており、弥生時代後期前半におくことができる。また同住居跡出土の須恵器の坏身は遺構検出中に発見されたもので流れ込みの遺物である。

２期は１号および４号住居跡が該当する。１号住居跡出土の甕（第４図２）は外面ハケ、内面ヘラケズリの特徴を持つ布留式系の土器である。また、４号住居跡出土の高坏（第10図２）は体部が直線的に伸びる特徴から井上編年の古墳時代１式に相当し、同住居跡から出土し図化できなかったものに薄手で外面タタキ、内面ヘラケズリの特徴を持つ庄内式系の甕の破片が出土しているがこれらは同型式の範疇で捉えられる。以上の点から１号、４号住居跡の時期を古墳時代前期初頭におくことができる。ところで、この時期の住居跡の形態は、４本柱の方形プランが一般的とされている。ところが本遺跡の１号、４号住居跡は２本柱で長方形プランを呈することから時期的な問題を踏まえて今後検討を要する。また、１号住居跡出土の高坏（第４図４）には脚下端部の対面に２対の透かしを有していた。県内では出土例がなく、今回時間的な制約もあり類例を求めることができなかったが今後の課題としたい。

３期は５号住居跡が該当する。屋内土坑から出土した高坏（第11図２）は特徴から福岡県吉井町塚堂遺跡のⅣ期に相当し、古墳時代前期の時期にあたる。

４期は６号住居跡が該当する。本住居跡では南西角に造り付けカマドを設けているのが確認された。ところで、住居跡の角にカマドを有するものは市内では求来里平島遺跡、尾漕遺跡Ａ地区で例があるものの県内では珍しい例である。本遺跡同様、求来里平島遺跡では須恵器は出土しておらず当該時期の遺構と思われ、本地域におけるカマド出現期を考えるうえで重要である。

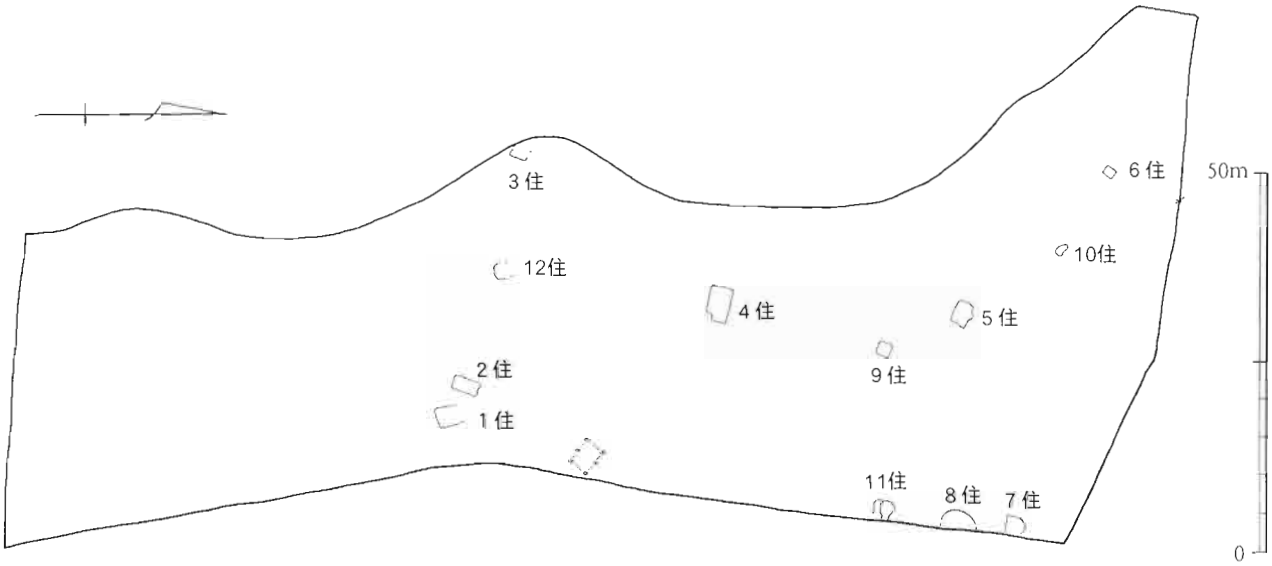
５期は７号住居跡が該当する。出土した甕から古墳時代後期頃にあたる。また、近隣の８号住居跡からは７号住居跡と同時期と見られる須恵器の坏身が出土している。この遺物に関しては７号住からの流れ込みの可能性が考えられる。なぜなら、７号住居跡の周辺にこの時期の遺構、遺物が発見されていないからである。

６期は３号住居跡が該当する。調査区の南西に位置し他の時期の遺構とは空間を隔てたところにある。３号住居跡は、出土した須恵器蓋や高台付の坏から８世紀中頃が与えられる。この点からは当該時期に周辺がどのような状況を呈していたかは不明であるが、小支谷に面した奥まったところに立地していることは何らかの意味を持っていたと考えることができよう。

遺跡の中心的な時期は、古墳時代前期で１号、４号住居跡（４世紀初め）から５号住居跡（４世紀後半頃）に移っていったと考えられる。以下、４期は６号住居跡を古墳時代中期におき５期は古墳時代後期頃に該当するとし、６期は３号住居跡より奈良時代（８世紀中頃）に比定できるものである。

以上の点から言えることは、これまで盆地内での集落の移り変わりを見るとき弥生時代において

拠点的な集落が台地上に形成され、その後古墳時代に入ると台地をおりて居住域が移っていくという過程があるなかで本遺跡においては小規模ながら逆の現象が見られるということである。



第37図　口が原遺跡集落概観図

《参考文献》

（報告書）

馬田弘稔　『塚堂遺跡Ⅳ』一般国道210号線浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第４集　1985

『塚堂遺跡Ⅱ』福岡県教育委員会　1984

小林義彦　『唐原遺跡Ⅱ－集落址－』福岡市埋蔵文化財調査報告書第207集　1989

後藤一重　『上野遺跡』豊後高田市文化財調査報告書第１集　豊後高田市教育委員会　1990

田中裕介　『日田市高瀬遺跡群の調査１』大分県教育委員会　1995

村上久和　『原田遺跡ほか』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書（４）　1995

友岡信彦　『日田条里ほか』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書（５）　1997

（論文／研究会資料）

井上裕弘　「北部九州における古墳出現前後の土器群とその背景」『古文化論叢』児嶋隆人先生喜寿記念論集　1991

田中裕介　「日田盆地三隈川南岸の考古学からみた開発史」　大分県地方史第154号　1994

第32回　埋蔵文化財研究集会　『古墳時代の竈を考える』　第１～３分冊　1992

２．５号土坑について

調査区東側の谷に面した位置で検出された遺構である。５号土坑については、出土遺物もなく時期不明で且つ用途不明であると思われたが検出時の状況などから地下式坑（壙）と考えている。地下式坑は現在、県内24遺跡33例が確認されており、分布域は県北部、国東半島東端、大分市、臼杵市、大野川流域などにみられ、日田市郡を除いた全県下で確認されている。発見例のなかで時期の明確なものは８例のみで多くは16世紀代（一部15世紀）の遺物を共伴している。今後、日田盆地においても遺構の発見の可能性が示唆され、詳しい考察についてはその機会に委ねたいが、今回の調査では遺物の出土がないことで時期を特定できないほか、どのような機能をもつ施設であるかもわからない。ただし11号住居跡との切り合い関係からその時期以降と捉えることはできよう。

遺構検出時の状況は、天井部とみられる地山土が既に崩壊しており黒色土の流入が認められた。この土坑の平面形態および出入口の存在、空間の利用法などから地下式坑に類するものと考えてみた。なお、地下式坑の定義は以下のとおりである。

「地平面下に竪壙を掘り下げてこれを入口部とし、その底面から横へ掘り下げて本体である地下室を築いた遺構」

これを踏まえてみた場合、今回検出された土坑は馬蹄形プランを呈し東側に入口を設けており、主体となる空間を有している。入口部から通道部において段をもつ構造で、段と主室底部との比高差は約25cmを測る。このような形態論については、これまで半田堅三氏、中田英氏、大橋康二氏、池上悟氏らの論考がある。

主室部分については、埋土により完全に埋もれていたものの主室の奥壁手前に礫を積み上げた状態が検出された。このような状況は他遺跡にも類例をみることができ、「壙」としての用途を想定する場合、屍床と考える例もあるようである。ただし、本遺跡の場合遺存状況から以上の点を言及することは難しい。

また、入口中段において炭化材が２点出土している。１点は50×17cm、最大厚が３cmで、もう１点は25×12cmで、厚みが１cmを測る。しかしながら、主室内で熱変した箇所および焼土、炭化物等は検出されておらず入口部分の構造物の一つなのであろうか明確な答えはでない。

地下式坑に関しては、遺物を伴うことが少ない点や用途が明確でないところが大きな問題点になっており加えて今回の例は検出状況が良好であるとは言えないために可能性を述べるに留まるが、現時点において日田地域には発見例がなく、慎重に考えたいとともに今後検出される機会を待ちたい。

※地下式坑の「坑」については、「壙」が用途を限定するため今回は前者を用いている。

《参考文献》

田中　英　　「地下式壙研究の現状について」『神奈川考古』第二号　1977

半田堅三　　「本邦地下式壙の類型学的研究」『伊知波良』２　1979

池上　悟　　「地下式壙瞥見」『立正史学』59号　1986

原田昭一　　「大分県における中世後半期の墓制変革」『考古学と信仰』　1994

川上秀秋ほか『岡遺跡』財団法人北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室　1989

田中裕介　　『日田市高瀬遺跡群の調査１』大分県教育委員会　1995

原田昭一　　「大分県における中世後半期の墓制変革」『考古学と信仰』同志社大学　1994

おわりに

今回の調査の結果、口が原遺跡は集落遺跡であることがわかったが決して拠点的な集落とは言えない。しかしながら、弥生時代後期～古墳時代初頭にかけての盆地北部における拠点的な集落である小迫辻原遺跡とほぼ同時期の遺構の発見があったことで当該時期の盆地全体の様相を考える上で貴重な資料であると思われる。特に、外来系の甕を出土した１号および４号住居跡の位置づけは重要であると考え、三隈川を挟んだ南北の台地で外来系の土器の流入する時期に先に述べたような同様の居住形態を見ることができた事実は今後この時期を理解して行くうえでの指針となろう。

また、６号住居跡のように住居跡の角に設けられたカマドは「類竈」とも称され、これまで畿内、北部九州などで検出されている。同様な例は、福岡県塚堂遺跡のほか、市内の求来里平島遺跡や尾漕遺跡で確認されているが県内ではまれである。一つの時期幅が想定できるとともにカマド構造の発展形態を知る上で重要であると考えられる。以上の発見例は、５世紀中頃～６世紀代に及ぶことがわかっている。カマド出現期の構造を理解するうえで資料性を十分に含んでおり今後の調査例が待たれる。また、５号土坑の問題はこれから発見例が増えることで明らかとなる部分が多いと思われる。この地域の歴史を解明するうえで口が原遺跡の果たす役割は大きいと考えるが、特に立地の点で台地上において弥生時代後期から古墳時代後期まで小規模ながらも継続して人々が生活していたことは今後再検討する余地があるように思う。

写 真 図 版

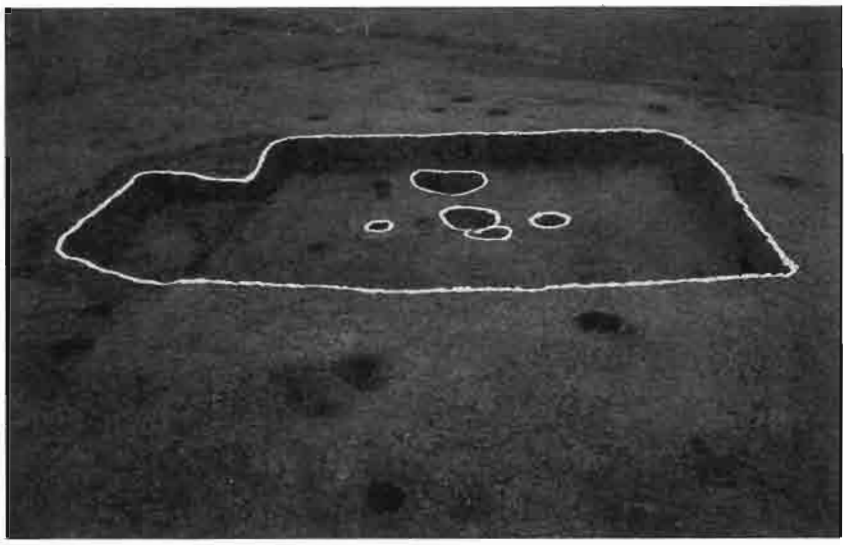
庁舎より遺跡を望む(北より)

PLATE 2

1 号竪穴住居跡

2 号竪穴住居跡

3 号竪穴住居跡



4 号竪穴住居跡

5 号竪穴住居跡

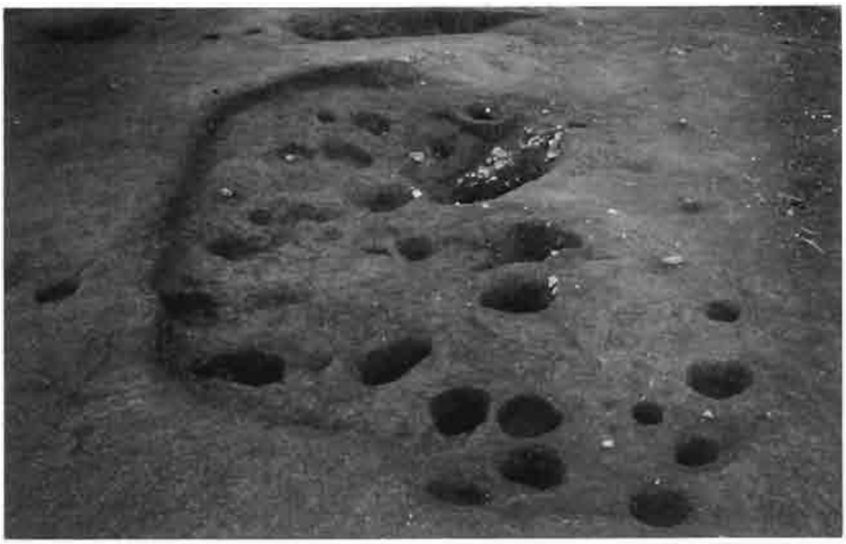
5 号住居跡屋内土坑遺物出土状況

PLATE4

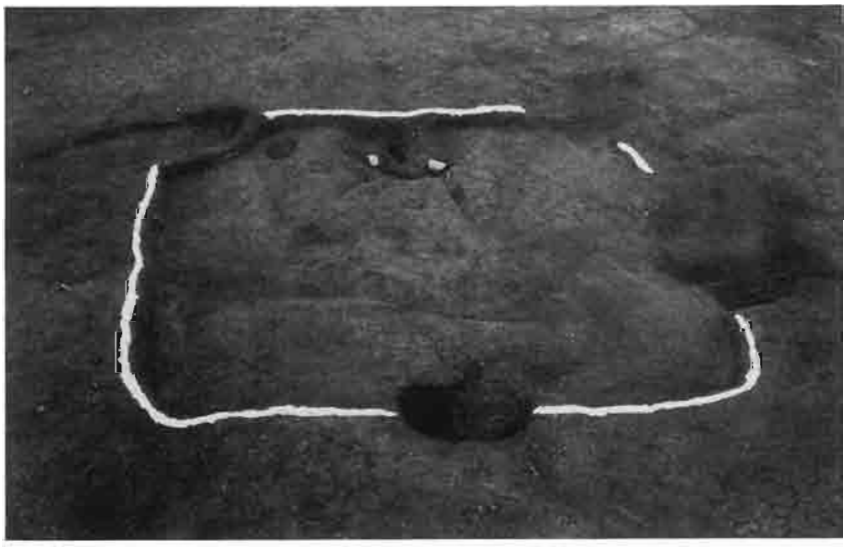
6号竪穴住居跡

6号竪穴住居跡カマド支脚

7号竪穴住居跡



8 号竪穴住居跡



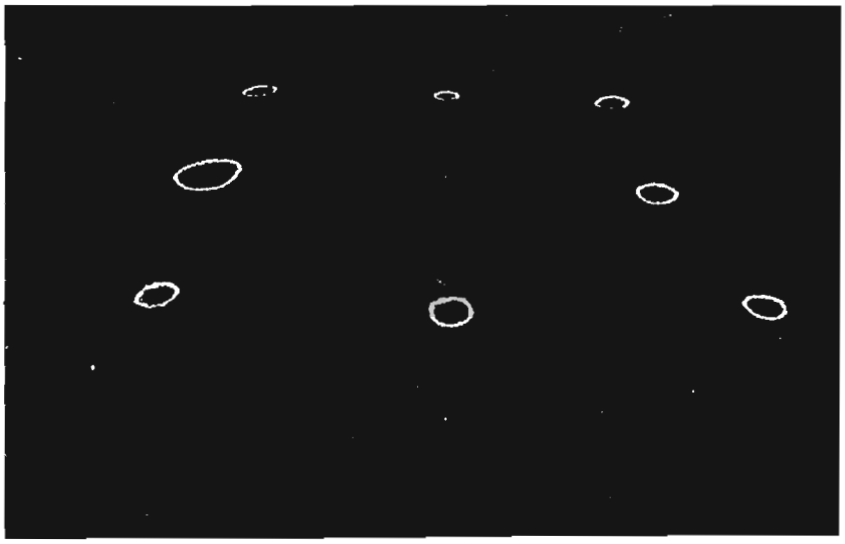
9 号竪穴住居跡

10号竪穴住居跡

PLATE 6

11号竪穴住居跡・5号土坑

5号土坑土層断面



1号掘立柱建物

1号土坑

PLATE 8

1 号住居跡出土遺物

1 号住居跡出土遺物

1 号住居跡出土遺物

3 号住居跡出土遺物

3 号住居跡出土遺物

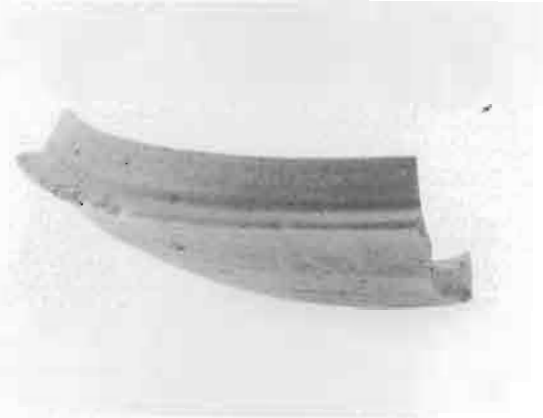
3 号住居跡出土遺物

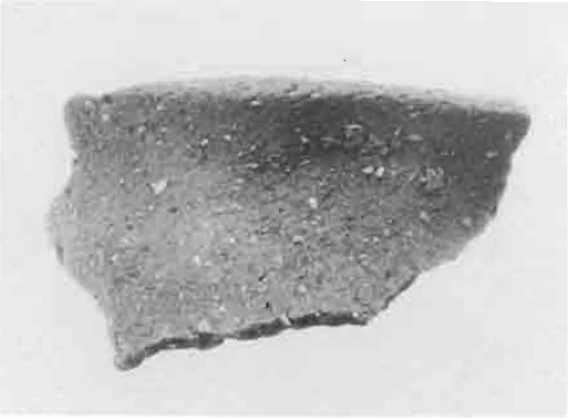
4 号住居跡出土遺物

5 号住居跡出土遺物

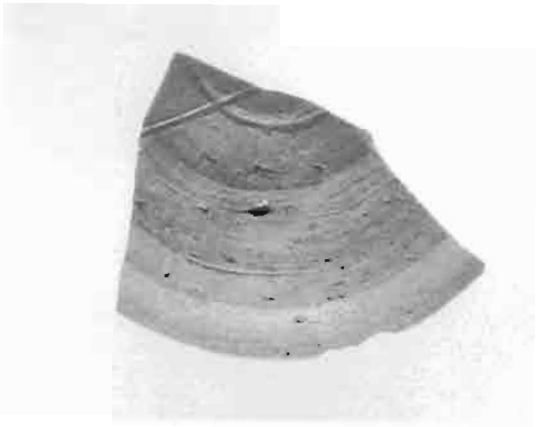
6 号住居跡出土遺物

6 号住居跡出土遺物

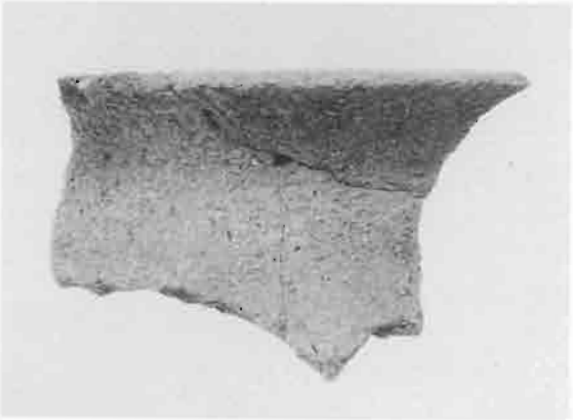




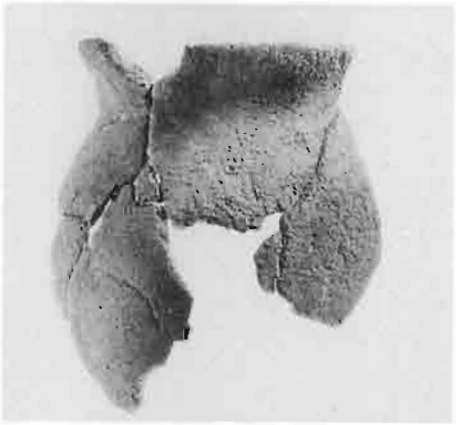
7 号住居跡出土遺物



8 号住居跡出土遺物

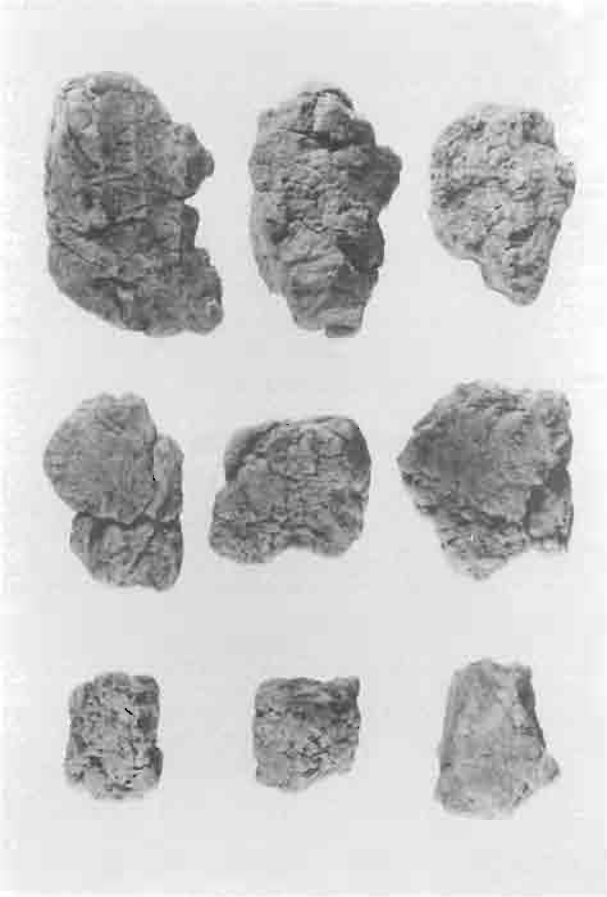


10号住居跡出土遺物

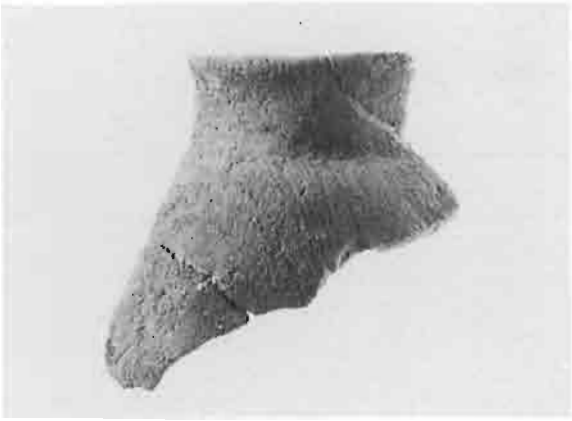


12号住居跡出土遺物

PLATE10



12号住居跡出土遺物



その他の遺物

報告書抄録

ふりがな	くちがばるいせき
書名	ロが原遺跡
副書名	日田市埋蔵文化財調査報告書
巻次	第17集
シリーズ名	
シリーズ番号	
編集者名	吉田博嗣
編集機関	日田市教育委員会
所在地	〒877-8601　大分県日田市田島２－６－１
発行年月日	1998年３月31日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
ロが原遺跡	大分県日田市 大字高瀬字 下木ノ上					1997 2．10～ 4．23	9,000㎡	工場建設

所収遺跡名	種類	主な時代			
ロが原遺跡	集落	弥生 古墳 奈良 近世	竪穴住居跡 竪穴住居跡 竪穴住居跡 土坑	土器 土器 土器 鉄製品	

口　が　原　遺　跡

日田市埋蔵文化財調査報告書

第　17　集

平成10年３月31日

発　行／日田市教育委員会
〒877-8601
大分県日田市田島２－６－１
印　刷／有限会社　朝 日 堂 印 刷